

長岡市埋蔵文化財調査報告書

長
岡
城
跡

長岡城跡

—大手通表町西地区市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2015

新潟県長岡市教育委員会

新
潟
県
長
岡
市
教
育
委
員
会

長岡市埋蔵文化財調査報告書

長岡城跡

—大手通表町西地区市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2015

新潟県長岡市教育委員会

例 言

1. 本書は、新潟県長岡市大手通2丁目地内に所在する長岡城跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、大手通表町西地区第一種市街地再開発事業に伴うものであり、長岡市教育委員会が実施した。
3. 遺跡確認調査に要した費用は文化財保護部局である長岡市教育委員会が負担し、国庫及び県費の補助交付金を受けた。本発掘調査は、原因者である大手通表町西地区市街地再開発組合（施工者 東亜建設工業・中越興業建設工事共同企業体）から調査員・作業員・重機等の提供を受けて実施した。
4. 遺物の注記は、「NOJ-ON」の後、出土位置、取り上げ番号等を記した。
5. 調査で出土した遺物及び、測量図面・写真等の記録類は、長岡市教育委員会で保管している。
6. 調査の体制は以下のとおりである。

（確認調査）

調査主体 長岡市教育委員会（教育長 加藤孝博）
事務局 長岡市教育委員会科学博物館（館長 小熊博史）
調査担当 長岡市教育委員会科学博物館 主査 鳥居美栄

（本発掘調査）

調査主体 長岡市教育委員会（教育長 加藤孝博）
事務局 長岡市教育委員会科学博物館（館長 小熊博史）
調査担当 長岡市教育委員会科学博物館 主査 鳥居美栄
現場代理人 田中博明（株式会社大石組）
調査員 竹部佑介（株式会社大石組）
調査補助員 遠藤昌代（株式会社大石組）

7. 本書の執筆は、1～3を鳥居が、それ以外を竹部が行った。
8. 遺物写真の縮尺は、実測図の縮尺に合わせた。ただし、異なるものはその旨を記載した。
9. 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、下記の方々より多大なるご教示・ご協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げる。（五十音順・敬称略）

相羽重徳 安藤正美

目 次

1	調査に至る経緯	1
2	遺跡の概要	2
3	確認調査	3
4	調査の概要	4
5	遺構	5
6	遺物	7
7	まとめ	9

引用・参考文献

挿図目次

第1図	遺跡位置図
第2図	長岡城跡の位置及び縄張り
第3図	確認調査トレンチ配置図及び土層柱状図
第4図	グリッド設定図
第5図	土層柱状図
第6図	調査区全体図
第7図	外堀跡杭列拡大図
第8図	遺構断面図

表目次

第1表	遺物観察表
-----	-------

図版目次

図版1	遺物実測図（1）
図版2	遺物実測図（2）
図版3	遺物実測図（3）
図版4	遺物実測図（4）
図版5	遺物実測図（5）
図版6	遺物実測図（6）
図版7	遺物実測図（7）
図版8	遺物実測図（8）
図版9	調査写真
図版10	遺物写真（1）
図版11	遺物写真（2）
図版12	遺物写真（3）
図版13	遺物写真（4）
図版14	遺物写真（5）

1 調査に至る経緯

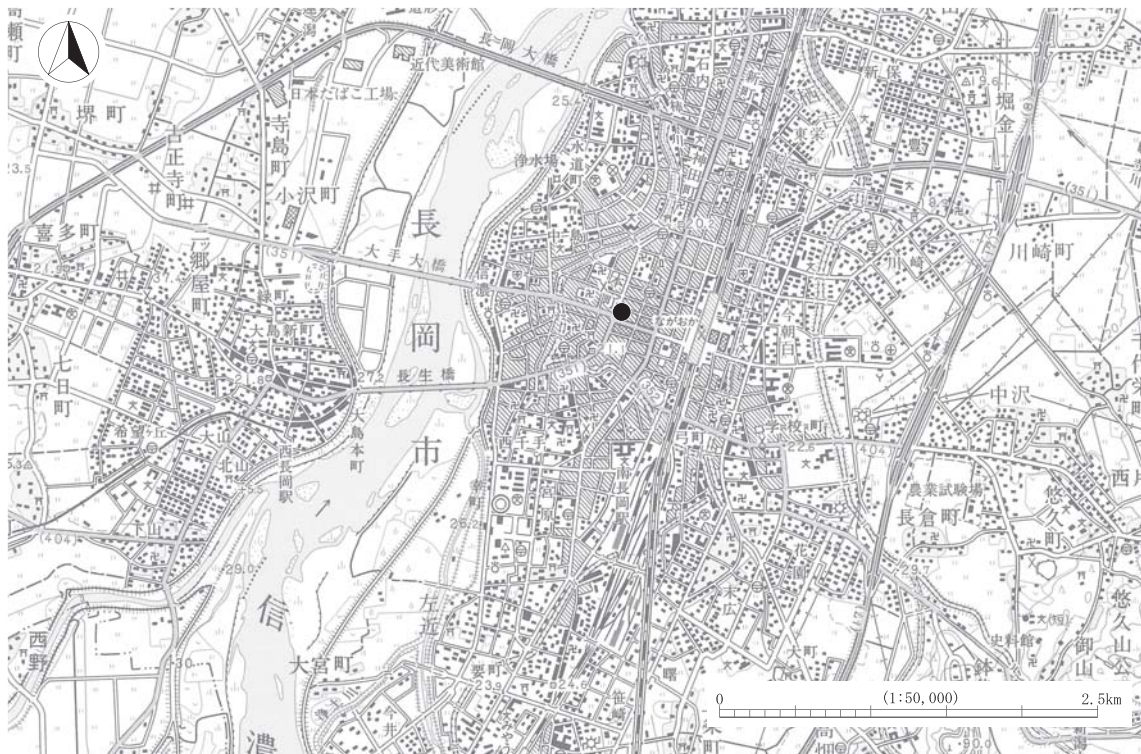
新潟県長岡市のJR長岡駅を中心とした地域は、江戸時代には長岡城及びその城下町として栄え、明治時代以降は都市化が進み、現在も中心市街地として利用されている。近年は施設の老朽化や社会状況の変化などを踏まえ、複数の市街地再開発事業が進められている。

平成23年9月、長岡市都市整備部まちなか整備課(当時)と長岡市教育委員会(以下「市教委」という。)とは、大手通表町西地区における再開発事業に係る埋蔵文化財の取扱いについて協議を開始した。市教委は、事業地が絵図などから長岡城跡の町口門に近い堀付近と推定されていること、非木造建造物がある部分は躯体により遺跡は既に破壊されていると見られるが、木造建造物部分は遺跡、特に堀跡が残存する可能性があること、遺跡が残存する場合、本発掘調査が必要となることなどを伝えた。

平成24年2月に市街地再開発事業が都市計画の決定を受け、大手通表町西地区市街地再開発準備組合とまちなか整備課と市教委とは協議を行い、木造建造物部分における解体後の確認調査の実施と、遺跡が残存した場合の本発掘調査を見込んだ事業計画とすることを合意した。平成25年5月に大手通表町西地区市街地再開発組合(以下「事業者」という。)が設立され、その後、既存建造物の解体工事が平成26年8月から始まることとなった。市教委は、平成26年9月1日付け長教博第203号で文化財保護法第99条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査の着手を新潟県教育委員会教育長に報告し、確認調査に着手した。その結果、事業地の一部において堀跡の下部が残存することを確認した。

事業者と長岡市中心市街地整備室と市教委とは本発掘調査の進め方について協議を行った。事業地内が既存建造物の解体工事中であることや、調査地が市街地であり周辺への影響を防ぐための土留め設備を設置する必要があることなどを考慮し、12月に本発掘調査を行うことで合意した。

市教委は、平成26年12月9日付け長教博第308号で新潟県教育委員会教育長に対して文化財保護法第99条第1項の規定による発掘調査の着手を報告し、本発掘調査を開始した。



第1図 遺跡位置図(国土地理院1:50,000地形図『長岡』から一部加筆)

2 遺跡の概要

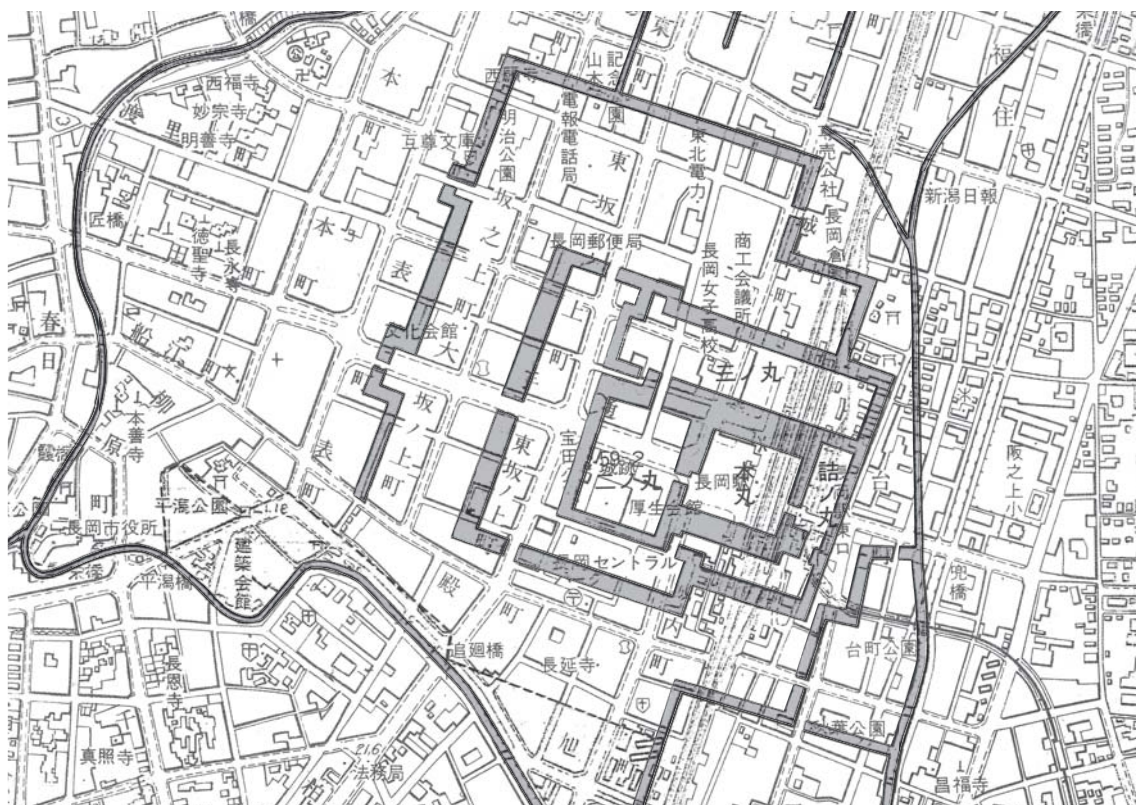
長岡城跡は、新潟県長岡市城内町1丁目ほかに所在する近世城郭遺跡である。

長岡市域のほぼ中央を信濃川が南から北へと貫流し、その兩岸には沖積平野が広がる。長岡城跡は信濃川右岸の沖積地に位置し、城跡周辺の標高は約21～22mである。

長岡城の築城を始めた堀直奇が在番していた蔵王堂城跡は、信濃川右岸の沖積平野に所在する。蔵王周辺は中世以来、中越の政治・経済の中心的地域であったが、信濃川に近く川欠などの水害が多かった。そのため、直奇は慶長10年（1605）頃から蔵王堂城の2kmほど南東にある長岡の地に城や町を作り始めたとされる。直奇が信州飯山へ転封になり、城作りは一時中断されるが、元和2年（1616）に直奇が長岡に戻り再開された。元和4年（1618）に直奇が本庄（村上市）に移封となった後は、代わって長岡に入った牧野忠成（初代長岡藩主）が工事を引き継ぎ、城郭と城下町を完成させた。城は、東の栖吉川と西の信濃川を自然の外郭とし、赤川（柿川）から水を引き込んで内郭に複数の堀を巡らせる。内郭のやや東に偏った位置に本丸があり、本丸の東に詰の丸、南西に二の丸、北に三の丸が配される梯郭式の縄張りである。

城は牧野家による長岡藩政の中心地として約250年間利用されたが、慶応4年（1868）の北越戊辰戦争によって城下町とともに焼失した。明治以降、城跡と城下町の周辺は商工業の中心地となり、土塁や堀は姿を消した。さらに、第二次世界大戦時の長岡空襲からの復興に伴って都市の近代化が進められた。

現在の地表面では堀や土塁などの遺構を確認することはできない。しかし、長岡駅上越新幹線駅舎建設やシティホール（仮称）建設事業、その他の再開発事業に伴う発掘調査、工事立会などにより、部分的にはあるが堀跡の基底部や侍屋敷地などが確認され、また、近世の遺物が出土している。さらに、大手通り地下駐車場建設に伴う発掘調査では二の丸の西堀の基底部の下から中世の井戸跡が確認され、周辺が中世の生活域であったことが確認されている。



第2図 長岡城跡の位置及び縄張り図 (S=1/10,000 『新潟県遺跡地図 昭和54年度版』から加筆・転載)

3 確認調査

事業地は、絵図などから長岡城の町口門近くの堀及びその外側にある町屋の範囲と推定されている。既存の木造建造物が除却された範囲を対象として、平成26年9月2日・8日・12日に確認調査を実施した。

任意の箇所に1 T～5 Tの調査トレンチを設定し、バックホウで掘削を行った。いずれのトレンチも深さ2 m前後まで近代以降の開発によると見られる攪乱土であった。攪乱土は褐色～暗褐色土、黄褐色土、砂が混ざっており、焼土粒や炭化物、陶磁器、瓦、陶管、レンガ、コンクリート塊などを含む。焼土粒が面的に広がる箇所もある。地表付近から落ち込む土坑が散在し、近代陶磁器や木材などを含み、焼土粒や炭化物を多く含むものが多い。土坑の規模は深さが1 m前後のものや2 m以上あるものなど多様である。

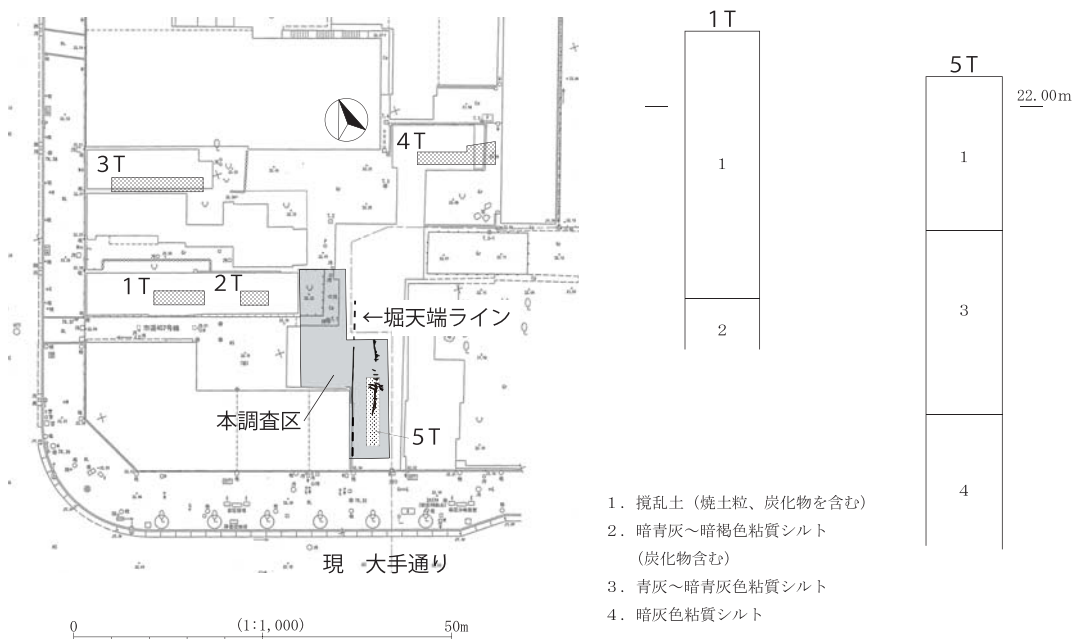
1 T～3 Tは町屋推定範囲に設定した。1 Tにおいて、約60cm×80cmの方形の落込みから、近代以降の陶磁器などとともに18世紀末～19世紀の陶磁器が出土した。井戸跡またはゴミ穴と見られる。2 T・3 Tは攪乱土の下は暗青灰色粘土または黄褐色土であり、西側ほど暗青灰色粘土層が薄い傾向がある。

堀の西側天端が推定される箇所に4 Tを設定した。トレンチ東端において暗青灰色～青灰色粘土を検出したが、トレンチ東側の非木造建造物建設に伴う攪乱の可能性が高く、堀天端とすることは困難である。トレンチの大部分は深さ約2.2mまで攪乱土が堆積し、その下は黄褐色土であった。

5 Tは深さ1 m付近までは他のトレンチと同様の攪乱土が堆積するが、その下は青灰色～暗青灰色粘質シルトとなる。深さ約2.5mで土色がさらに暗くなり、さらに70cm以上掘削しても同様の状況が続いたことから、堀の覆土と判断した。

攪乱土中やゴミ穴、井戸跡の可能性のある落ち込みなどから、近代以降の陶磁器などと混在して近世陶磁器が出土した（図版1）。近世陶磁器の多くは肥前系であり、瀬戸・美濃陶器、瓦質土器を少量含む。

以上の結果から、事業地の大部分では近世以前の遺構は所在しないが、5 T周辺は堀跡が残存することが明らかとなった。堀跡の一部に新設躯体が設置されることから、堀の様相や西側天端の位置などを明らかにするため、堀跡周辺における本発掘調査が必要であると判断した。



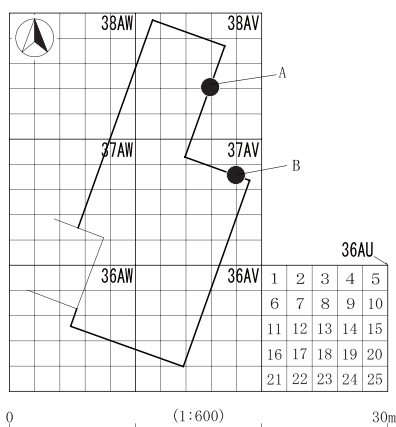
第3図 確認調査トレンチ配置図 (S=1/1,000) 及び確認調査トレンチ土層柱状図 (S=1/50)

4 調査の概要

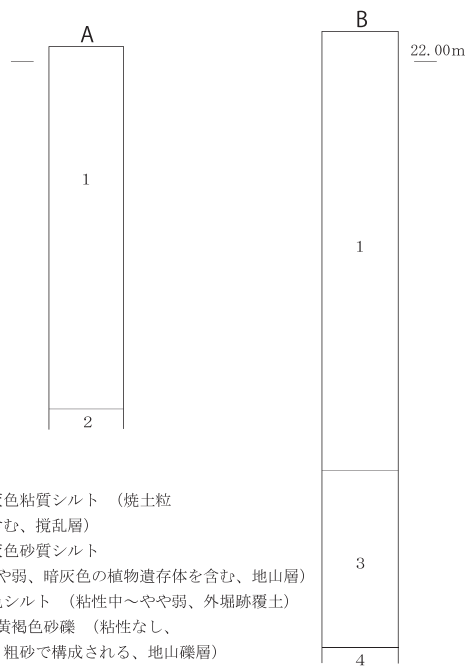
グリッドの設定 (第4図) 長岡城跡関連調査においては、平成20・21年度に実施したシティホール(仮称)整備事業に伴う発掘調査以来、世界測地系座標を用いたグリッドの設定を共通して使用してきた。1 A (X=16440, Y=31010) を基準とした1辺10mの大グリッドを設定しており、表記には算用数字とアルファベットを用いた。南北方向は算用数字を北に向い1、2、3……、と加算し、東西方向へは東に向かいA、B、C……、とアルファベットを振っている。しかし、今回の調査対象地区は1 Aの基準点より西側に所在するため、共有のグリッドを西側に伸展する必要が生じ、Aより西に向かいAA、AB、AC……、とアルファベットを2文字にすることで対応した。グリッドの基準はこれまで同様、グリッドの北東隅にあたり、基準から南西側に対象となるグリッドが存在する。大グリッドを2m間隔で25分割し、北西隅を1、南東隅を25とした小グリッドを設定した(第4図)。

調査の経過 平成26年11月より調査区の外周の土留め工等仮設を進め、並行して重機による表土除去を開始した。12月10日には表土除去の完了を待って、作業員を投入。重機での攪乱層掘削を基本とし、遺構精査及び遺物の取り上げを行いつつ、同12日には攪乱層の掘削を終了、外堀跡を検出した。同13日より降雪があり、以降、除雪作業と土留め工を並行して進めた。同18日には現場の復旧が終了した。遺構精査の結果、杭列を検出。人力によるトレンチ掘削と記録を進めた。同20日、重機によるトレンチの掘削を行い、外堀跡のセクション記録を終了した。次いで、横矢板材の取り上げを行った。同22日には調査区北壁付近で出土した横矢板材の取り上げを行い、発掘調査作業を完了した。同日、土留め工及び場内トレンチの埋め戻しを完了、現場の引き渡しを行った。

基本層序 (第5図) 調査対象地区内においては、現地表面下2m付近まで近代以降の攪乱により、層位の確認が困難な状況であった。1層は一括して攪乱層としたが、外堀跡範囲に含まれる地点に関しては、遺物取り上げ時に外堀跡攪乱層として記録を行った。近世から近代にかけての陶磁器が出土し、特に近代以降の陶磁器が多量に出土する。近代以降の陶磁器は著しく被熱した個体が多く、戦災による影響を物語る。2層は青灰色を呈する砂質シルトであり、植物遺存体を含む。遺構外の地山である。遺物は確認できなかった。3層は外堀跡の覆土である。近世から近代にかけての遺物が出土した。4層は明黄褐色を呈する砂礫層であり、2・3層の下面に等しく堆積する。旧信濃川による河川堆積層である。外堀跡の渠底はこの4層に達する。



第4図 グリッド設定図 (S=1/600)



1. 10YR4/1 暗灰色粘質シルト (焼土粒・炭化物を含む、攪乱層)
2. 5BG6/1 青灰色砂質シルト (粘性中～やや弱、暗灰色の植物遺存体を含む、地山層)
3. 黒褐色～灰色シルト (粘性中～やや弱、外堀跡覆土)
4. 10YR6/6 明黄褐色砂礫 (粘性なし、多数の円礫と粗砂で構成される、地山礫層)

第5図 土層柱状図 (S=1/50)

5 遺構

長岡城外堀跡西側天端の一部（以下、外堀跡）及び廃棄土坑状遺構（SX1）を1基検出した（第6～8図）。また、外堀跡においては横矢板を含む杭列を検出した。調査区内は近代以降に度重なる攪乱を受けており、遺構検出が非常に困難であったため、遺構検出時の標高は現地表下2.5m、標高19.5m前後と低い。これまでに行われた長岡城関連の調査結果からも、往時の地表面は、これより高い位置に存在したと考えられる。そのため、今回検出した外堀跡のプランは、往時の堀天端ラインとは異なる可能性がある。

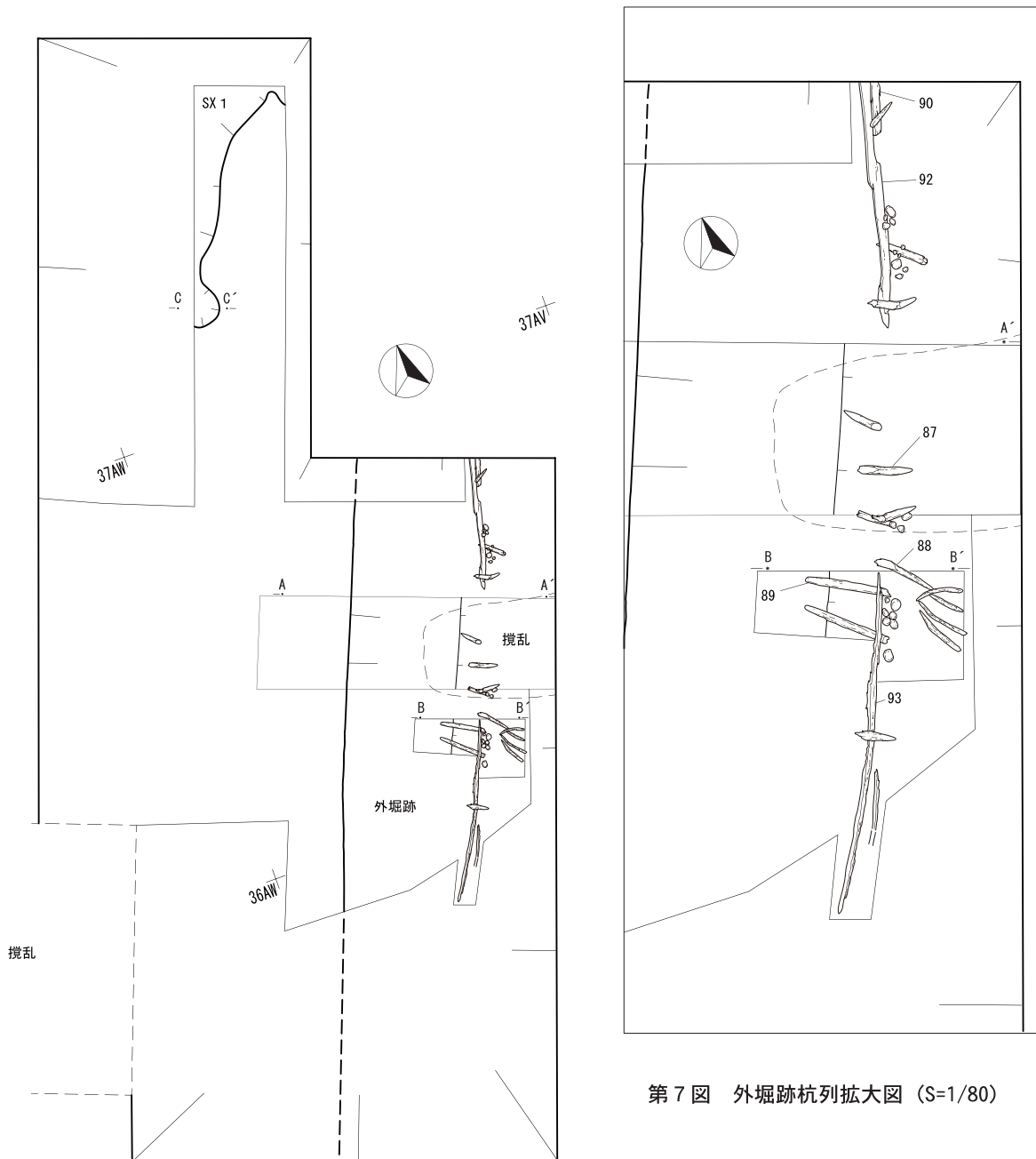
外堀跡 調査区の東半で長さ10.1mに渡って検出、主軸方位はN-21°-Eで調査区长軸にほぼ並行する。調査区東半全体が外堀跡の範囲に含まれ、東に向かい傾斜角度70度で緩やかに傾斜する。調査区東壁面からおよそ2.1m手前の地点で堀の立ち上がりが認められ、確認面からの深さは地山中の礫層を0.4m程度掘り込んだ高さにあたる1.18mを測る。西側天端から調査区東壁まではおよそ4.6mの距離がある。平成20・21年度に実施された厚生会館地区の調査において認められた外堀跡の幅は9.7mから11.4mの間で推移しており、同調査における検出面の標高が20.6mであったことを踏まえると、今回の調査区東壁はおおよそ外堀のほぼ中央を縦断する位置に存在すると考えられる。『正保城絵図越後国古志郡之内長岡城之図』（国立公文書館蔵）等の古図によると、長岡城外郭を構成する町口門の北側では外堀が一部西側に突出する区域が認められる。今回の調査における堀天端の検出プランは直線状であり、調査区外にて鉤の手に曲がると推定される。そのため、本調査区が突出部内に収まるのか否かは判然としない。

覆土はレンズ状に堆積するが、部分的に後世の攪乱を受けた痕跡がある。特に37AV18・19を中心として、近代以降と考えられる炭化木材の集中箇所が存在した。黒褐色を呈する外堀跡セクションの覆土4層および杭列セクションの覆土7層を鍵層とし、同層以下を外堀跡の覆土下層と位置付けて調査を行った。外堀跡の機能していた年代幅と近世以降における度重なる災害・火災・戦災等を考慮するならば、複数回に渡る浚渫・埋め立てが行われていたと考えるべきだが、今回の調査における土層セクションにおいては明確な痕跡を確認するには至らなかった。

杭列 外堀跡内37AV9・14・18・19・23・24・36AV2・3グリッドにおいて、14本の杭と4枚の横矢板による土留め跡を検出した。杭列は外堀跡西側天端ラインとほぼ平行しており、この内7本の杭が横矢板92及び93の渠底側を抑えるように斜めに打設されていた。また、杭88のように横矢板93の法面側に打設された杭も存在し、杭89と合わせて法面側と渠底側から横矢板を挟み込むように打設された状況がうかがえる。杭の上端はともに検出面より上位にあり、等しく折損している。また、杭の先端部は、杭88で認められたように渠底上に留まり、渠底下の地山礫層に到達しない。ただし、杭89は地山礫層に到達する（図8）。また、杭88の東脇では、覆土下層において4本の杭が渠底側より斜めに密に打設されている。土留めの補強に用いられたものか。杭は87が1.12m、最も長い杭89が1.48mの長さを測る。杭の打設間隔は攪乱による欠損もあり判然としないが、杭87から杭88に至る地点では杭間0.6m前後を測り、比較的均等に配されている。横矢板92においても打設された杭の間隔は一部これに近い。横矢板92・93の間は横矢板を検出できなかったが、前項で述べたように、近代以降の炭化木材の集中する攪乱が存在しており、杭列が残されている点からも、92・93の間を繋ぐ横矢板が存在していた可能性が考えられる。横矢板92は調査区外に伸びており、調査区北壁付近では、更に別の横矢板90と重なるようにして検出された。また、横矢板93は調査区内で完結しており、長さは4.1mを測る。93の北端より約2.4m南下した地点では、93の渠底側に更なる横矢板が重なるようにして検出された。92・93ともに上下端部付近には釘や鏝による補強・接合痕が認められ、上下方向に複数枚の横矢板で構成されていた可能性が考えられる。また、横矢板はともにわずかに法面側に

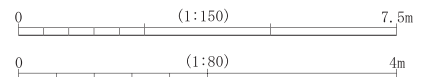
傾いて検出されており、渠底側の側面上に乗るようにして、径10cmから人頭大ほどの円礫が散在していた。これら円礫もまた、土留め構成材の一部であった可能性が考えられる。

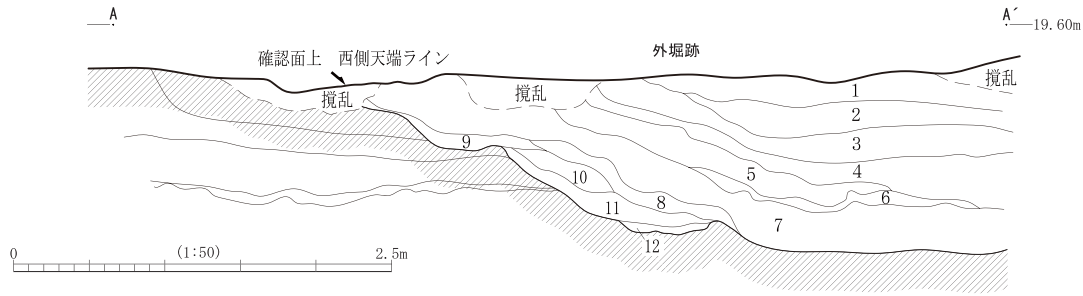
SX 1 調査区北端における38AVグリッドにおいて、木材片や植物遺存体を含む不整形の落ち込みを検出した。遺構プランの大半は調査区外の北西側に伸びており、検出した範囲では、南北軸5.4m・東西軸1.8mを測る。深さは0.5mで、北西に向かい緩やかに傾斜する。覆土中からの遺物は皆無であったが、上面より近代以降の遺物に混ざる形で近世陶磁器が比較的多く出土した。特に遺物は38AV 8・12・13グリッドに集中する傾向が認められ、本調査の約2割の遺物量を占める。廃棄土坑の可能性が考えられる。



第6図 調査区全体図 (S=1/150)

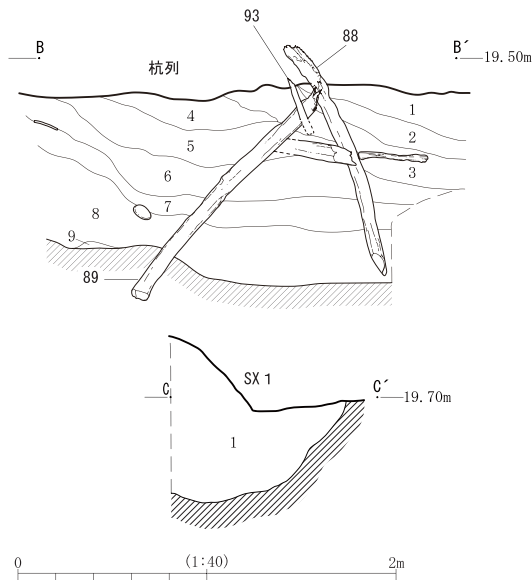
第7図 外堀跡杭列拡大図 (S=1/80)





外堀跡

1. 10YR3/1 ~ N3/0 黒褐色～暗灰色粘質シルト
(粘性やや強、しまり弱、微細な木材片を多数含む)
2. N3/0 ~ 10YR4/1 暗灰色～灰色粘質シルト
(粘性やや強、しまり中～やや弱)
3. 10YR4/1 灰色粘質シルト (粘性やや強、しまりやや弱、
径1cm程度の灰オリーブ色ブロックを含む)
4. 10YR3/1 ~ 10YR2/1 黒褐色～黒色粘質シルト
(粘性やや強、しまりやや弱、径10cm程度の礫をわずか含む)
5. N3/0 暗灰色シルト
(粘性中～やや強、しまり中、径5cm程度の礫を含む)
6. 5BG7/1 明青灰色砂質シルト (粘性中～やや弱、しまり弱)
7. N3/0 暗灰色シルト (粘性中～やや強、しまり中、
径10cm程度の礫を含む、5とほぼ同質)
8. 5BG7/1 明青灰色砂質シルト
(粘性やや弱、しまり弱、礫を多数含む)
9. N3/0 暗灰色シルト
(粘性中～やや強、しまり中～やや弱、炭化物を多数含む)
10. 10YR4/1 ~ N3/0 灰色～暗灰色粘質シルト
(粘性やや強、しまり中、礫を含む)
11. N3/0 暗灰色粘質シルト (粘性やや強、しまり中)
12. 5BG7/1 明青灰色砂質シルト
(粘性やや弱、しまり弱、径10cm程度の礫を多数含む)



杭列

1. 10YR3/1 ~ N3/0 黒褐色～暗灰色粘質シルト (粘性やや強、しまり弱)
2. N3/0 ~ 10YR4/1 暗灰色～灰色粘質シルト
(粘性やや強、しまり中～やや弱、径5cm程度の礫を多数含む)
3. 10YR3/1 灰色粘質シルト
(粘性やや強、しまりやや弱、径10cm程度の礫を含む)
4. N3/0 ~ 10YR4/1 暗灰色～灰色粘質シルト
(粘性やや強、しまりやや弱、径10cm程度の礫を含む)
5. N3/0 ~ 10YR4/1 暗灰色～灰色粘質シルト
(粘性やや強、しまりやや弱、径5cm程度の礫を多数含む)
6. N3/0 ~ 10YR4/1 暗灰色～灰色砂質シルト (粘性中～やや弱、しまり弱、
青灰色シルトを含む)
7. 10YR3/1 ~ 10YR2/1 黒褐色～黒色粘質シルト (粘性やや強、しまり中、
径10cm程度の礫を含む)
8. N3/0 ~ 10YR4/1 暗灰色～灰色粘質シルト (粘性やや強、しまり弱、
径10cm程度の礫を含む)
9. 5BG7/1 明青灰色粘質シルト (粘性中～やや強、しまりやや弱)

SX 1

1. 5YR4/1 ~ 5YR3/2 褐灰色～暗赤褐色粘質シルト
(粘性中～やや弱、しまり弱、木片・植物遺存体を多数含む)

第8図 遺構断面図

6 遺物

近世陶磁器、漆器・曲物等木製品、杭・横矢板等の土留め部材、鉄製品が出土した(図版2～8)。陶磁器はコンテナ18箱(約25.3kg)あり、出土遺物の大半を占める。近代以降の陶磁器も多数出土したが、中世以前の遺物は認められなかった。個別の詳細な法量・調整等については観察表に記載した。

近世陶磁器の概観 17世紀に帰属する遺物が全体の2割程度に対し、18世紀は3割強で時期が下るに従って出土量が増加する。19世紀まで下る遺物は約3割である。外堀跡の覆土および覆土下層から出土した近世陶磁器は、全体の5割弱にあたる11.7kgに及ぶ。外堀跡上面にあたる攪乱層から出土した分と合わせると全体の6割を超える資料が外堀跡から出土した。また、SX 1上面出土陶磁器が全体の2割を占めるため、遺構外出土の陶磁器は少量である。特に、現在の大手通り寄りとなる調査区南側における遺物出土量は希薄であった。

前項（5 遺構）にて述べたとおり、外堀跡は近代以降の攪乱を受けており、特にその上面である攪乱層に関しては出土層位と遺物の帰属年代における相関関係は見出し難い。しかし、例えば遺存状況の比較的良好な挿鉢においては、19世紀に帰属する28・29が攪乱層より出土し、より下位の覆土ではより古い17世紀から18世紀にかけての挿鉢に優位性が認められる。このため、外堀跡出土遺物に関しては、攪乱層と覆土に分けて記載する。掲載遺物に関しては、遺存状況と器種・年代を基準に選別して図化した。

外堀跡 攪乱層出土陶磁器（23～50） 磁器の出土量が3割を超え、最も磁器比率が高い。陶器は覆土以下の層に比べ比較的少量である。肥前系陶器が最も多く、椀（23）、皿・鉢類（25・26）、挿鉢（27）、甕（30）が出土、椀24など京・信楽系陶器がわずかに含まれる。17世紀と19世紀の個体点数による比率はおおよそ4：5である。磁器は陶器同様、肥前系が主体であり、椀（32～38）、椀蓋（39）、皿・鉢（40～42・44～48）、瓶（49・50）が出土した。この他、景德鎮製の皿（43）が1点出土した。遺構外と合わせ計2点出土している。磁器は18世紀後半から19世紀にかけて、特に19世紀の遺物が多い。

外堀跡 覆土・覆土下層出土陶磁器（51～70） 覆土および覆土下層に関しては、層位別に記載するには点数が少ないため、一括して記載する。陶器は肥前系陶器（51・52・56・57）が主体的ではあるが、攪乱層に比べ比率は下がる。越前焼（54・53）が17世紀前葉および19世紀に入る他、備前焼（55）が17世紀中葉の時点で入っているようである。挿鉢（54～57）の遺存状況が比較的良好であった。磁器は陶器同様、肥前系が主体的であり、ほぼ肥前系磁器で占められる。椀（58～60）、椀蓋（61～64）、皿（65・66）、油壺（67）、仏飯器（68）が出土しており、各時期の遺物が認められるが、18世紀後半から19世紀にかけての資料が多い傾向にある。瓦質土器は2点、焜炉（69）と七輪（70）である。19世紀の所産か。

SX 1 上面出土陶磁器（71～80） 内訳は74%が陶器、25%が磁器である。陶器・磁器ともにほぼ肥前系で占められるが、越前焼をわずかに含む。肥前系皿・鉢類（72・73）のほか、挿鉢（74）が出土した。磁器では、椀（75～78）、皿（79）がある。二彩手の鉢がまとまって出土しており、17世紀後半から18世紀にかけて出土遺物の帰属年代が集中する。

漆器・木製品（81～86） 接合不可の細片を含め、漆器は8点出土した。1点がSX 1 上面、7点が外堀跡に集中する。出土層位は黒漆製品が1点（81）のみで、81も内面は赤漆を用いる。83は口縁が輪花状で六弁花の可能性がある。84は底面に4箇所、穿孔されている。椀81の形状から、漆器は19世紀に帰属すると考えられる。

曲物85・86はそれぞれ底板、側板と考えられる。個体間の接合関係は不明。ともに堀覆土より出土した。この他、外堀跡からは加工材・端材がわずかに出土した。

杭列部材（87～93） 外堀跡にて検出した杭列の内、杭3点（87～89）及び横矢板材4点（90～93）を図化した。90・91は調査区北壁付近にて、92と重なって出土した。4点とも上下端付近に鏝ないしは釘の付着痕跡があり、板材同士の接合が行われていたと考えられる。また、92・93のように割れ目の大きな箇所を鏝によって固定している状況も認められた。

鉄製品（94～96） 94は横矢板92に付着していた鏝を抽出したものである。幅は3.3cmあり、通常の平鏝に比べ明らかに幅広である。折釘（95・96）は横矢板92に付着している1点を除けば3点出土、うち外堀跡出土の2点を図化した。95は大きく湾曲するが、ほぼ完存している。横矢板93付近の覆土下層から出土した。96は先端部の腐食が著しく、大きく欠損する。

7 まとめ

本調査区で検出した堀跡は、『正保城絵図越後国古志郡之内長岡城之図』（国立公文書館蔵）によると、長岡城外郭の町口門付近に該当する。検出した西側天端一帯は旧・表二ノ町にあたり、正保年間には町屋が広がる地域であった。相対する東側は家中屋敷が所在したとされる。出土遺物に、比較的上手の製品が定量認められる点は当該地域の所在を考慮すれば当然であるといえよう。また、各時期の遺物が定量出土するが、19世紀に帰属する資料が多い点に注視しておくべきである。外堀跡の埋没過程において、19世紀代に遺物の投棄量が増加した点に関しては、北越戊辰戦争及び近代都市の発展、明治27年の大火等、当該期における要因が既に明らかとなっており、論を待たない。ただ、明治11年刊行の市街地図『長岡みやげ』に外堀跡が痕跡的に描かれ、以降の市街地図では外堀跡の記載が認められないことから、明治期、19世紀末頃に外堀跡の埋め立てが完了した可能性が考えられる。出土遺物のうち、幕末を上限とし下限が明治20年代まで下る一群が存在し、これを裏付けるものとする。

外堀跡及び外堀跡内の杭列の他、検出された遺構は廃棄土坑状の不整形な遺構（SX1）のみであり、近世における空間利用を復元する遺構には恵まれなかった。これまでの調査でも遺構の遺存状況が不良である旨が繰り返し述べられてきており（駒形1987・1997）、本調査においても、分層が困難である攪乱層の厚い堆積は、当該地域における北越戊辰戦争以降の度重なる開発と破壊とを物語る。特に、近年行われた長岡城内郭推定地である大手口地下駐輪場地区の調査で明らかであったように、長岡城内郭は都市の近代化に伴い近世以前の遺構が大幅に失われており（鳥居ほか2010）、長岡城跡の姿を発掘調査から復元することは非常に困難であるといえる。しかし、都市化の比較的静穏であった外堀周辺においては、今回の調査において良好な資料が得られたことから、破壊を受けてなお、長岡城跡関連の発掘調査においては、城下の生活の実態をうかがい知ることのできる可能性が残されていると考えられる。今後、これまでの調査の成果と合わせて、近世長岡城下の研究の進展が望まれる。

引用・参考文献

- 相羽重徳 2010 「新潟県における近世播鉢の流通Ⅰ（上越編）」『三面川流域の考古学』第8号 奥三面を考える会
相羽重徳ほか 2012 「新潟県における近世播鉢の流通Ⅱ（佐渡・三島郡・古志郡編）」『三面川流域の考古学』第10号 奥三面を考える会
木村孝一郎 2008 「越前焼の編年の研究ノート」『吾々の考古学』和田晴吾先生還暦記念論集刊行会
九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』九州近世陶磁学会
駒形敏朗 1987 『長岡城跡発掘調査（城内ビル）』長岡市教育委員会
駒形敏朗 1997 『長岡城跡発掘調査報告書—大手通り地下駐輪場建設—』長岡市教育委員会
鳥居美栄ほか 2010 『長岡城跡（厚生会館地区）—シティホール（仮称）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』長岡市教育委員会
鳥居美栄ほか 2010 『長岡城跡—長岡駅大手口地下自転車駐輪場等建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』長岡市教育委員会
長岡郷土史研究会編 1982 『長岡の古地図 その1』長岡郷土史研究会
長岡郷土史研究会編 2002 『長岡の古地図 その2』長岡郷土史研究会
長岡市 1992 『長岡市史』資料編1 考古
新潟県 1987 「第1章 幕藩体制の成立と領主支配 第4節 諸藩の成立と藩政」『新潟県史』通史編3 近世一
乗岡 実 2002 「近世備前焼播鉢の編年案」『岡山城三之曲輪跡—表町一丁目地区再開発ビル建設に伴う発掘調査—』岡山市教育委員会
藤澤良祐ほか 2006 『江戸時代のやきもの—生産と流通—』財団法人瀬戸市文化振興財団
四柳嘉章 2006 『ものと人間の文化史 131—II 漆II』財団法人法政大学出版局

第1表 遺物観察表

(1) 陶磁器

図版 No.	遺物 No.	出土位置	遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)		口径 残存率 (●/3/6)	底径 残存率 (●/3/6)	施釉等	胎土色	文様・調整等 (外/内)	備考
							口径	器高						
1	1	試掘1T	井戸小	覆土	陶器	壺小				鉄釉 (にぶい赤褐)	褐灰	全面施釉		
1	2	試掘1T			肥前系磁器	碗		6.2	18	透明釉、染付	灰白	波/圏線・見込みに「寿」字	広東碗 18世紀末~19世紀初頭	
1	3	試掘1T	井戸小	覆土	肥前系磁器	段重	13.7	27	27	透明釉、染付	灰白	蛸唐草	18世紀末~19世紀	
1	4	試掘2T			肥前系磁器	碗	8.9	18	18	透明釉、染付	灰白	半菊/圏線・見込みに紋あり	広東碗 18世紀末~19世紀初頭	
1	5	試掘2T			肥前系磁器	瓶				透明釉	灰白	染付か	17世紀	
1	6	試掘3T	ゴミ穴小	覆土	瀬戸・美濃陶器	天目碗	11.2	7	7	柿釉 (褐)	灰白		呉器手、17世紀後半	
1	7	試掘3T			肥前系陶器	碗	11.0	9	9	透明釉	黄灰	全体に貫入あり	呉器手、17世紀後半	
1	8	試掘3T	ゴミ穴小	覆土	肥前系陶器	碗	11.4	2	36	透明釉	黄灰	全体に貫入あり	呉器手、17世紀後半	
1	9	試掘3T	ゴミ穴小	覆土	肥前系陶器	皿	7.7	2	12	灰釉 (灰オリーブ)	橙	高台露胎、胎土目	16世紀末~17世紀初頭	
1	10	試掘3T	ゴミ穴小	覆土	肥前系陶器	皿		4	36	灰釉 (灰オリーブ)	橙	高台露胎、胎土目	16世紀末~17世紀初頭	
1	11	試掘3T			瀬戸・美濃陶器	碗	9.4	4		灰釉 (明オリーブ灰)	灰白	全面施釉、貫入あり	胎土は磁器質	
1	12	試掘3T			肥前系磁器	碗		3	6	透明釉、染付	灰白	斜格子	18世紀~19世紀	
1	13	試掘3T			肥前系磁器	皿	12.5	3		透明釉、染付	灰白	外面に圏線		
1	14	試掘3T			肥前系磁器	皿	21.8	2	12	透明釉、染付	灰白	見込みに染付	17世紀か、二次焼成	
1	15	試掘3T			肥前系磁器	皿	13.2	27	36	青磁 (明オリーブ灰)	灰白	見込み庇の目釉剥ぎ	18世紀前半	
1	16	試掘3T			肥前系磁器	仏飯器	6.8	7	36	透明釉、染付	灰白	外面に草花	18世紀~19世紀	
1	17	試掘3T			肥前系磁器	段重	13.6	1	6	透明釉、染付	灰白	外面に草花・圏線	19世紀	
1	18	試掘4T			肥前系陶器	碗		4	36	灰釉 (浅黄~明オリーブ灰)	黄灰	高台露胎、量付に胎土目剥離痕あり	16世紀末~17世紀初頭	
1	19	試掘4T			肥前系磁器	碗	6.3	3	24	青磁 (明緑灰)、染付	灰白	高台内に渦福/四方褌・二重圏線・手書き五弁花	18世紀中頃	
1	20	試掘4T			肥前系磁器	皿	24.3	1	6	透明釉、染付	灰白	二重圏線/二重圏線・波	17世紀後半	
1	21	試掘4T			肥前系磁器	鉢	12.4	3	9	透明釉、染付	灰白	圏線・二重圏線・草花小	18世紀後半~19世紀	
1	22	試掘4T			瓦質土器	焙烙	17.8	4			灰白		全体に煤付着し黒色を呈す	
2	23	37AV14・15	外堀跡	攪乱	肥前系陶器	碗		2	18	灰釉 (灰白) / 透明釉	にぶい橙 ~にぶい黄橙	高台露胎	17世紀	
2	24	37AV17	外堀跡	攪乱	京・信楽系陶器	碗	10.9	7	18	灰釉 (灰白~浅黄)	にぶい黄橙	高台露胎	19世紀、長石粒混ざる	
2	25	36AV2	外堀跡	攪乱	肥前系陶器	皿	13.6	18	36	灰釉 (オリーブ灰 ~浅黄)	にぶい橙	砂目、高台露胎	17世紀前半	
2	26	36AV2	外堀跡	攪乱	肥前系陶器	鉢	38.2	2		灰釉 (明褐灰~灰白)	明赤褐~橙	全面施釉		
2	27	37AV14	外堀跡	攪乱	肥前系陶器	播鉢		12			橙~赤橙	ロクロ成形、底部回転系切り、胎土目 押し目6日一単位・幅2.2cm	17世紀前半	
2	28	36AV2・3	外堀跡	攪乱	陶器	播鉢	35.0	1			灰~褐灰	押し目ナデ消し、全面施釉	産地不明、19世紀か 胎土砂粒多く混ざる	

図版 No.	遺物 No.	出土位置	遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			口径 残存率 (●/36)	底径 残存率 (●/36)	施釉等	胎土色	文様・調整等 (外/内)	備考
							口径	器高	底径						
2	29	37AV17・18・19・23・24	外堀跡	攪乱	陶器	挿鉢	32.9	15.3	13.2	9	36	浅黄橙～赤橙	壺付以外全面施釉	石見か、19世紀か	
2	30	37AV8・11・12・13・14・15	外堀跡	攪乱	肥前系陶器	甕						灰黄褐 ～にごぶい黄橙	胴部外面に松樹	17世紀末～18世紀	
2	31	37AV19	外堀跡	攪乱	陶器	灯明具	5.8	5.3	4.1	35	36	浅黄橙		胎土砂粒混ざる、19世紀か 会津の可能性あり	
2	32	37AV17	外堀跡	攪乱	肥前系磁器	椀	10.6			18		灰白	桃・樹木	17世紀後半	
2	33	37AV17	外堀跡	攪乱	肥前系磁器	椀	9.8	5.4	3.6	4		灰白	唐草	17世紀末～18世紀前半	
2	34	36AV2・3	外堀跡	攪乱	肥前系磁器	椀			3.9	1		灰白	斜格子・圏線/圏線	18世紀～19世紀	
2	35	37AV18・19	外堀跡	攪乱	肥前系磁器	椀			4.0	36		灰白	虫籠・二重圏線/圏線・見込みに銘あり	19世紀	
2	36	37AV23	外堀跡	攪乱	肥前系磁器	椀	10.6			7		灰白	唐唐草/雷・圏線	19世紀	
2	37	37AV18・19	外堀跡	攪乱	磁器	椀	10.4	5.5	3.2	9	24	灰白	植物/連続文、見込みに「寿」字	19世紀	
2	38	37AV18・19	外堀跡	攪乱	肥前系磁器	椀	7.9	7.3	5.2	4	36	灰白	雷・水草・水草・蝶・欄唐/雷、見込み「乾」字	19世紀	
2	39	37AV18・19	外堀跡	攪乱	肥前系磁器	椀蓋	10.1	3.0				灰白	雲、丸寿字・圏線 /雲・丸寿字・二重圏線・四方標	19世紀	
3	40	37AV18・19	外堀跡	攪乱	肥前系磁器	皿	17.9	3.4	7.8			灰白	型打、内面全体に鯉の陽刻	18世紀	
3	41	37AV17	外堀跡	攪乱	肥前系磁器	皿			4.4		18	灰白	高台砂粒付着/圏線・見込み蛇の目輪刺ぎ	18世紀	
3	42	37AV14	外堀跡	攪乱・覆土	肥前系磁器	鉢	23.1			8		灰白	口縁輪花 唐草/梅花・波	18世紀後半	
3	43	37AV12・18・19	外堀跡	攪乱	中国産磁器	皿	20.3	3.9	11.6	7	18	灰白	芙蓉手、水禽・草花・宝尽くし 高台内靑白	17世紀初頭 景徳鎮	
3	44	37AV17・18	外堀跡	攪乱	肥前系磁器	皿			7.9	7		灰白	二重圏線・高台内に圏線/紅葉 ハリささえ痕あり	17世紀後半	
3	45	37AV12	外堀跡	攪乱	肥前系磁器	皿			13.2	9		灰白	唐草・二重圏線/網・植物 ハリささえ痕あり	17世紀末～18世紀前半	
3	46	36AV2・3	外堀跡	攪乱	肥前系磁器	皿			8.8	12		灰白	欄唐/牡丹、蛇の目高台	19世紀	
3	47	37AV23	外堀跡	攪乱	肥前系磁器	皿	14.8			5		灰白	型打、口縁輪花 唐草/みじん唐草、焼継ぎ痕あり	19世紀	
3	48	37AV18・19	外堀跡	攪乱	磁器	鉢						灰白～白	雷/雷、焼継ぎ痕あり	八角鉢 19世紀	
3	49	37AV17	外堀跡	攪乱	肥前系磁器	瓶						灰白	草花	18世紀後半～19世紀	
3	50	36AV2・3	外堀跡	攪乱	肥前系磁器	瓶			11.4	3		灰白	二重圏線	18世紀後半～19世紀	
4	51	37AV14	外堀跡	覆土	肥前系陶器	椀小			6.1	24		明赤褐～橙	高台露胎	17世紀	
4	52	37AV14・23	外堀跡	覆土 ・覆土下層	肥前系陶器	大皿			13.3	18		明赤褐 ～にごぶい赤褐	鉄絵、高台脇ケズリ	17世紀初頭	
4	53	37AV14	外堀跡	覆土	越前焼	鉢	22.4			4		浅黄橙	全面施釉	胎土砂粒・酸化鉄多く混ざる、 19世紀	
4	54	37AV18	外堀跡	覆土	越前焼	挿鉢	34.6	19.0	13.6	3	18	橙～浅黄橙	押し目8日一単位・幅2.9cm	胎土鉄多く混ざる、17世紀 前半	

図版 No.	遺物 No.	出土位置	遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			口径 残存率 (●/36)	底径 残存率 (●/36)	施釉等	胎土色	文様・調整等 (外/内)	備考
							口径	器高	底径						
4	55	37AV23	外堀跡	覆土下層	備前焼	搦鉢	30.1	12.1	13.8	36	36	赤～暗赤褐	押し目13日一単位・幅3.1cm 見込み入り組み状に施入	17世紀中葉	
4	56	37AV23	外堀跡	覆土下層	肥前系陶器	搦鉢			11.1	18		明赤褐～赤褐	押し目13日一単位・幅3.0cm 高台露胎、底部回転糸切り	17世紀後半～18世紀初頭	
4	57	37AV18・19	外堀跡	覆土	肥前系陶器	搦鉢	38.8	18.3	17.4	8	36	橙～橙	押し目10日一単位・幅3.0cm、全面施釉 高台内砂胎土目痕あり	18世紀前半	
4	58	37AV18・19	外堀跡	覆土	肥前系磁器	椀	10.5	6.8	4.4	1	18	灰白	植物か・圈線、高台内砂粒付着	17世紀後半	
4	59	37AV12・13	外堀跡	覆土	肥前系磁器	椀	10.8	6.1	4.2	12		灰白	内外とも一重網目・紅葉	17世紀後半	
4	60	37AV12・13・17	外堀跡	覆土	肥前系磁器	椀	11.8			18		灰白	四方罽・斜格子・井桁・圈線	18世紀後半～19世紀	
5	61	37AV14	外堀跡	覆土	肥前系磁器	椀蓋	10.8	2.9		3		灰白	雲か/圈線・見込みに「福」字	18世紀後半～19世紀初頭 広東樹蓋	
5	62	37AV18・23	外堀跡	覆土 ・覆土下層	肥前系磁器	椀蓋	8.2	2.3		35		灰白	松・笹・圈線/二重圈線・見込みに文字あり	19世紀	
5	63	37AV23	外堀跡	覆土下層	肥前系磁器	椀蓋	10.2	2.6		18		灰白	網・波/四方罽・二重圈線・見込みに松竹梅	19世紀	
5	64	37AV18・19	外堀跡	覆土下層	肥前系磁器	椀蓋	10.2	2.8		24		灰白	桐・風景/四方罽・二重圈線・見込みに柳	19世紀	
5	65	37AV14	外堀跡	覆土	肥前系磁器	皿						灰白	唐草/唐草	18世紀～19世紀	
5	66	37AV14	外堀跡	覆土	肥前系磁器	皿			9.8	18		灰白	二重圈線・高台内に渦福/見込みに手書き五弁花	18世紀中頃	
5	67	37AV14	外堀跡	覆土	肥前系磁器	油壺か			5.5	36		灰白	草花、圈線		
5	68	37AV14	外堀跡	覆土	肥前系磁器	仏飯器		5.6	3.8	30		灰白	割唐草・圈線	19世紀	
5	69	37AV23	外堀跡	覆土下層	瓦質土器	煙炬か	26.0			4		にぶい橙	口縁端部穿孔、内面突帯あり	胎土砂礫・酸化鉄粒多い	
5	70	37AV19・23	外堀跡	覆土 ・覆土下層	瓦質土器	七輪	20.8		17.2	9	18	にぶい橙～橙	板作り、内面に刷毛状工具・指ナズ痕あり	胴張り方形、上下部 接合不可	
6	71	38AV8・12・13	SX1	上面	肥前系陶器	皿			4.5	36		灰白	高台露胎、砂目	17世紀前半	
6	72	38AV8・12・13	SX1	上面	肥前系陶器	鉢	10.7			36		橙	切り高台 (3箇所) 内面に白泥による刷毛目波状文あり、砂胎土目	17世紀後半～18世紀 外面全体に煤・油痕付着	
6	73	38AV8・12・13	SX1	上面	肥前系陶器	鉢	28.8	7.3	11.4	1	14	にぶい橙～黄橙	内面に鉄釉・銅緑釉による松樹 高台露胎	17世紀後半～18世紀	
6	74	38AV8・12・13	SX1	上面	肥前系陶器	搦鉢	32.0	13.1	12.0	4	9	黄橙～褐灰	押し目11日一単位・幅3.3cm 口縁部のみ施釉、底部回転糸切り	17世紀前半	
6	75	38AV8・12・13	SX1	上面	肥前系磁器	椀			4.3	36		灰白	高台内砂粒付着	17世紀前半	
6	76	38AV8・12・13	SX1	上面	肥前系磁器	椀	9.4	7.4	4.8	14	36	灰白	外面に一重網目・圈線	17世紀中頃	
6	77	38AV8・12・13	SX1	上面	肥前系磁器	椀	11.7			9		灰白	内面に四方罽・二重圈線	18世紀後半	
6	78	38AV8・12・13	SX1	上面	肥前系磁器	椀	8.9	4.9	3.3	10	18	灰白	竹林/二重圈線・圈線、見込みに手書きの五弁花	18世紀後半	
6	79	38AV8・12・13	SX1	上面	肥前系磁器	皿	15.0			8		灰白	唐草/梅樹	18世紀後半～19世紀	
6	80	38AV8・12・13	SX1	上面	瓦質土器	灯明皿	10.7	1.7	5.9	5	6	浅黄橙	内外面とも口縁部付近に煤・油痕の付着あり		

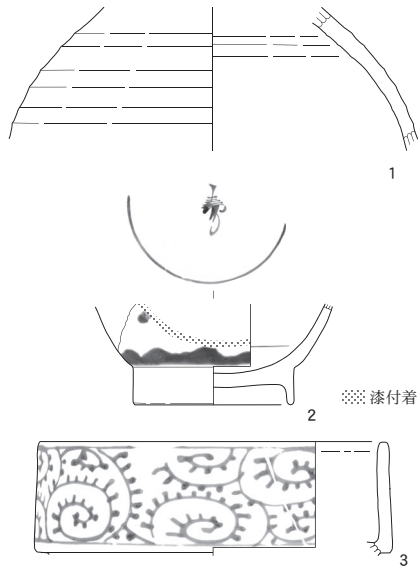
(2) 漆器・木製品

図版 No.	遺物 No.	出土位置	遺構	層位	種別	器種	法量 (cm) ※最大値			文様・調整等 (外/内)	木取り	備考
							長さ ・口径	高さ ・器高	幅 ・底径			
7	81	37AV18	外堀跡	覆土	漆器	椀			5.8	黒漆 / 赤漆、 高台内赤漆による銘あり	横木取り	19世紀か
7	82	37AV18	外堀跡	覆土下層	漆器	椀				赤漆 / 赤漆、 高台内黒漆による銘あり	横木取り	19世紀か
7	83	37AV18	外堀跡	覆土下層	漆器	杯	10.0			赤漆 / 赤漆、口縁輪花	横木取り	
7	84	37AV18	外堀跡	覆土	漆器	椀か				赤漆 / 赤漆、 底部穿孔 (4箇所)	横木取り	
7	85	37AV8	外堀跡	攪乱	木製品	曲物底板	22.1	1.5		側面斜めに加工	板目	
7	86	37AV18	外堀跡	覆土	木製品	曲物側板	23.4	0.4	8.1		柃目	上下端は生きか、左右折損
7	87	37AV18・19	外堀跡	覆土	木製品	杭	112.2		8.3		芯持丸木	上端折損
7	88	37AV23	外堀跡	覆土	木製品	杭	132.2		9.4		芯持丸木	上端折損
7	89	37AV23	外堀跡	覆土	木製品	杭	147.5		8.3		芯持丸木	下端摩耗著しい、上端折損
8	90	37AV9	外堀跡	覆土	木製品	横矢板	125.5	5.6	29.5	東西側面に鏝の痕跡あり	柃目	南北端切損
8	91	37AV9	外堀跡	覆土	木製品	横矢板	109.6	4.6	14.5	東西側面に鏝付着 (2箇所)	柃目	上下端・南北端折損
8	92	37AV9・14	外堀跡	覆土	木製品	横矢板	325.6	5.3	33.3	西側側面に鏝4、折釘1付着	柃目	上端・南北端折損
8	93	37AV23 36AV3・7・ 8	外堀跡	覆土	木製品	横矢板	410.5	6.0	41.3	東側側面に鏝1付着	柃目	上端折損、南北端一部折損

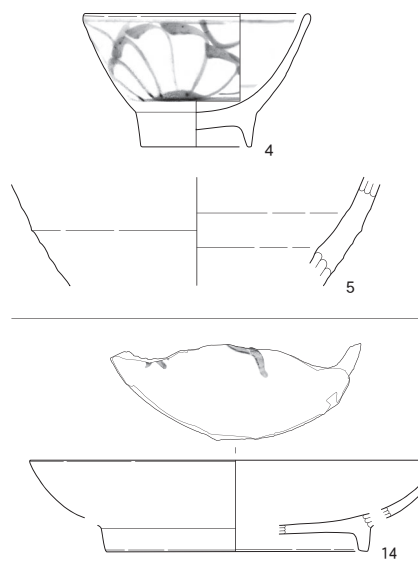
(3) 鉄製品

図版 No.	遺物 No.	出土位置	遺構	層位	種別	器種	法量 (cm) ※最大値			文様・調整等 (外/内)	備考
							長さ ・口径	高さ ・器高	幅 ・底径		
7	94	37AV9	外堀跡	覆土	鉄製品	鏝	8.6	0.7	3.3	上下端1.9cm 屈曲する	92付着鏝を抽出したもの、端部腐損
7	95	37AV23	外堀跡	覆土下層	鉄製品	折釘	9.9	0.4	1.3	上端0.5cm 屈曲する	
7	96	36AV2・3	外堀跡	覆土	鉄製品	折釘	7.3	0.5	1.4	上端0.6cm 屈曲する	先端部折損

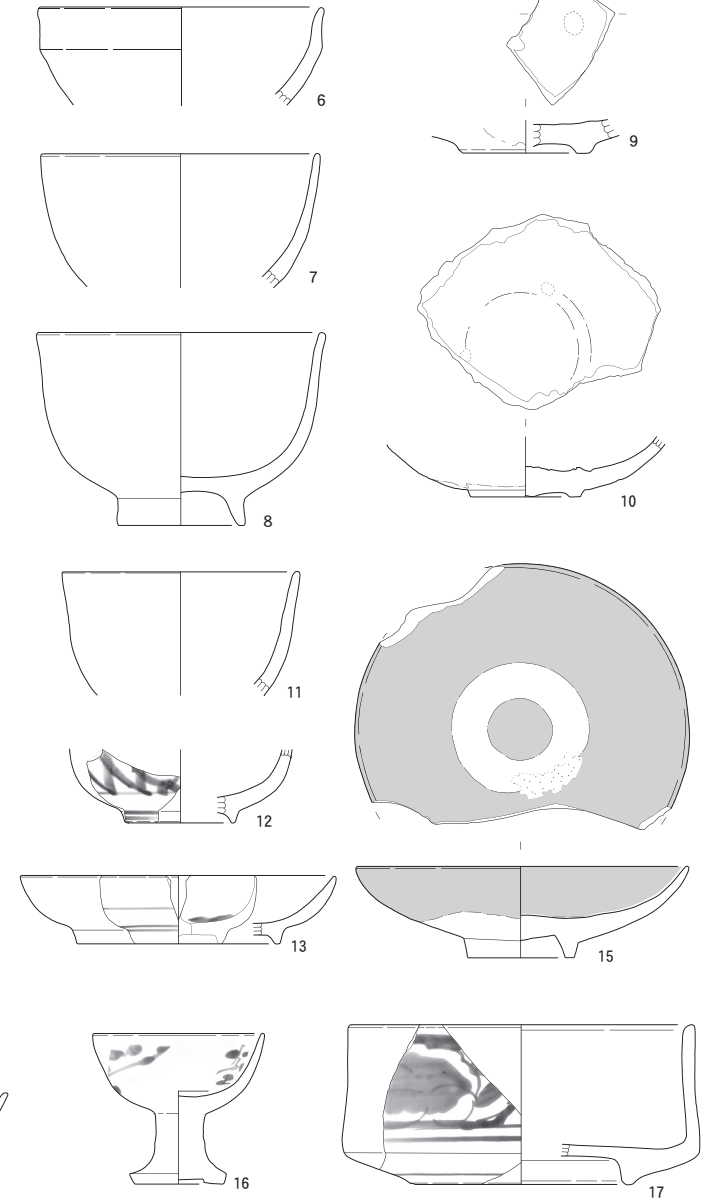
試掘 1T



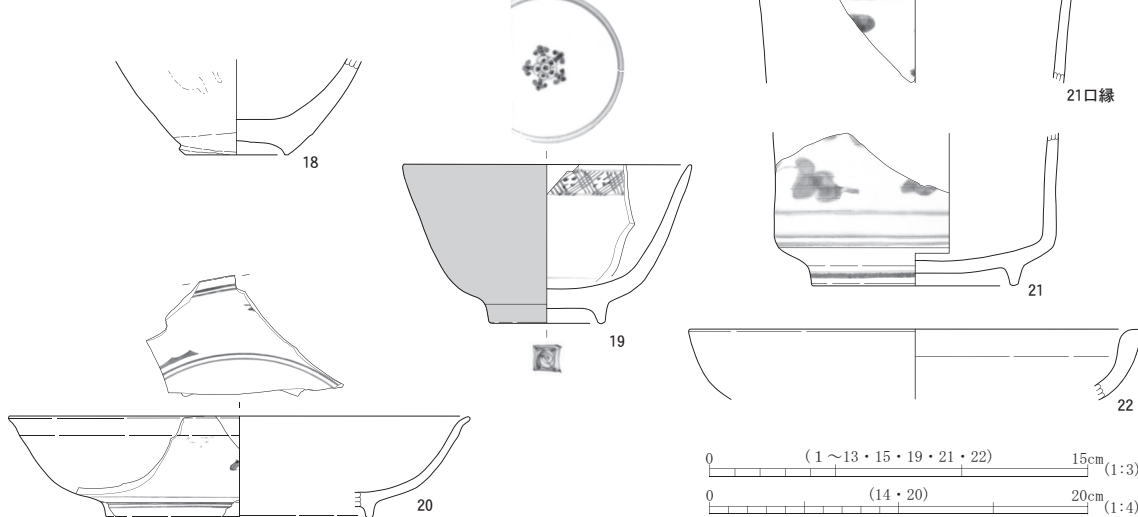
試掘 2T



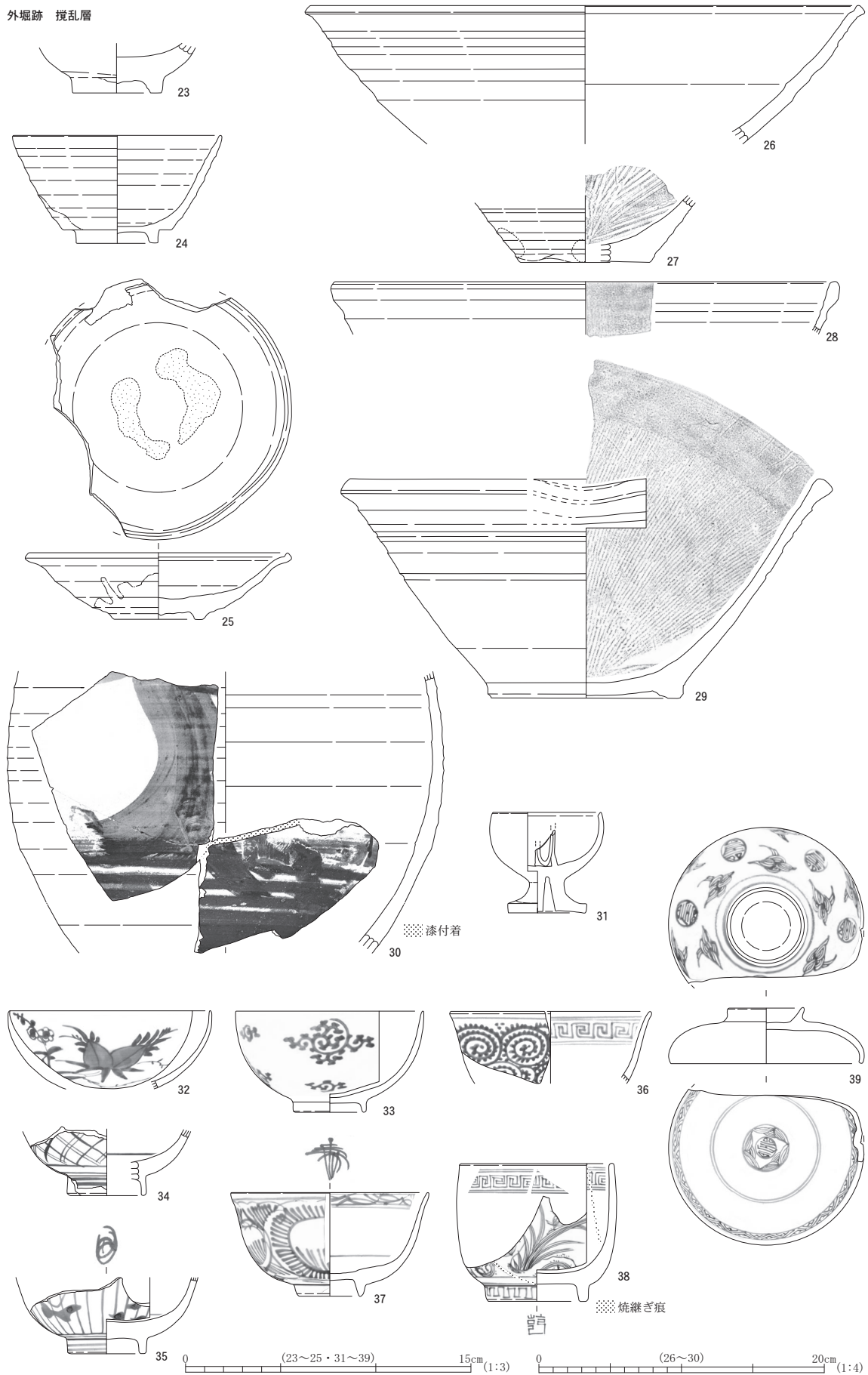
試掘 3T

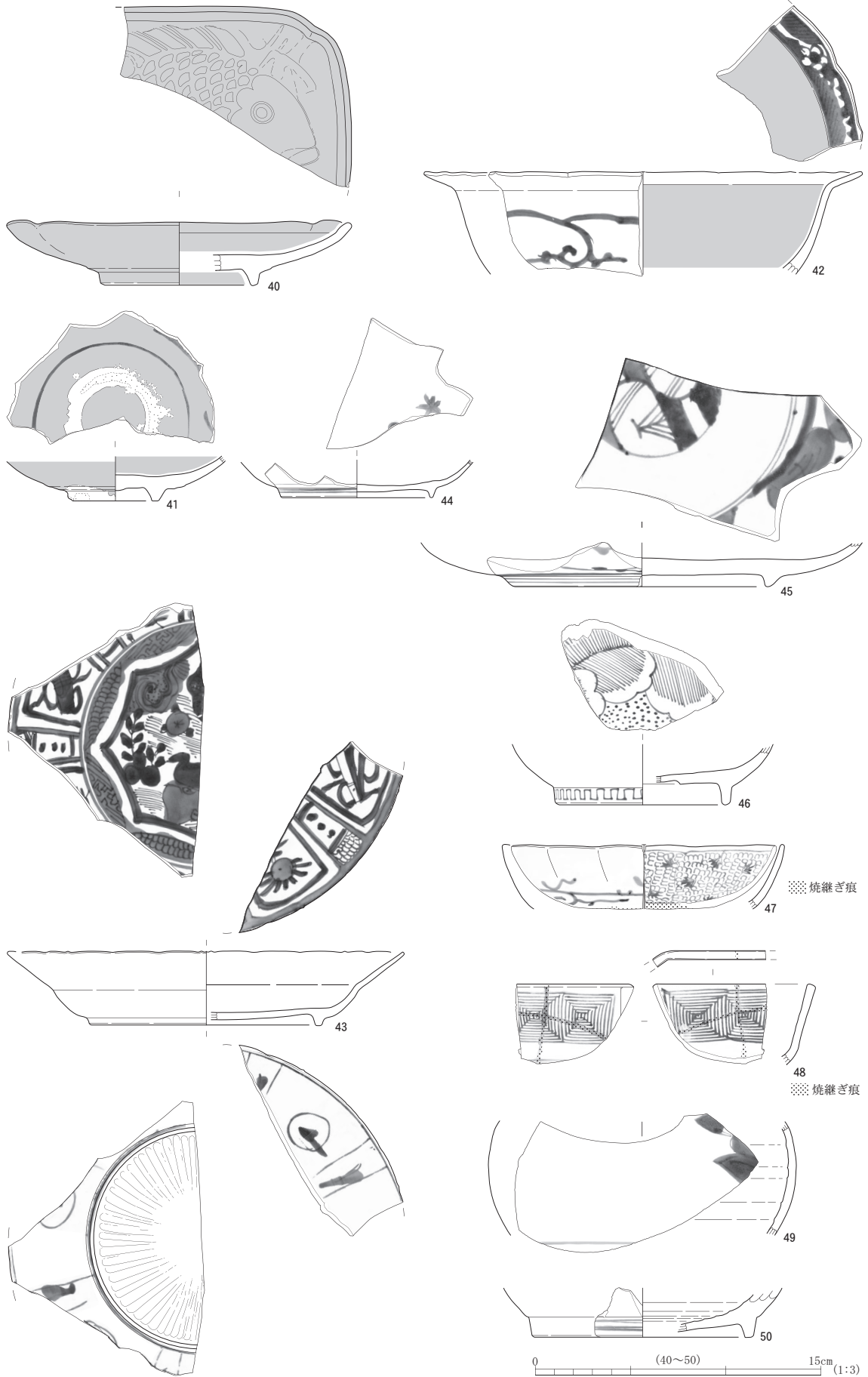


試掘 4T



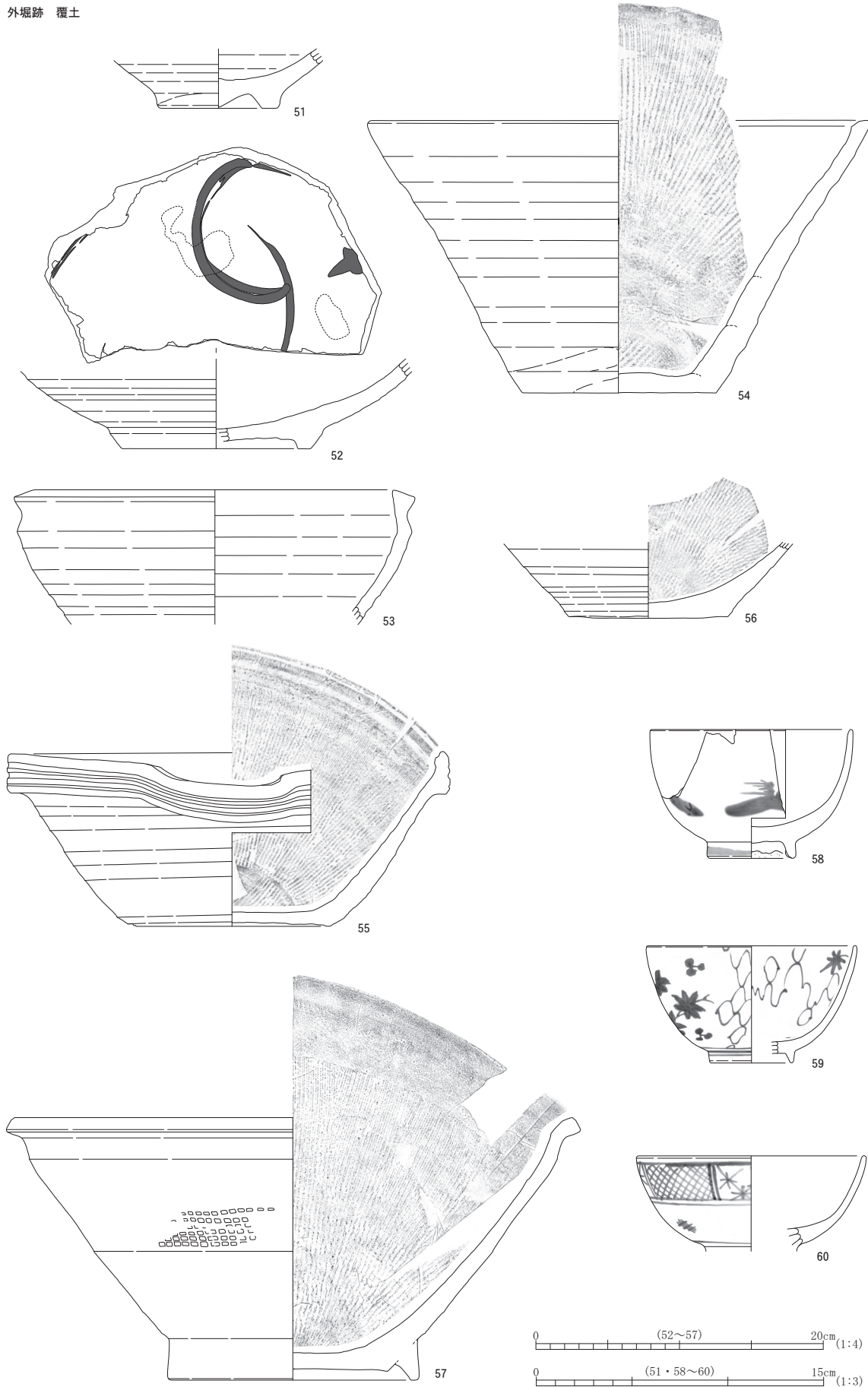
外堀跡 攪乱層

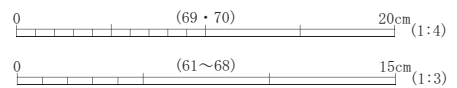
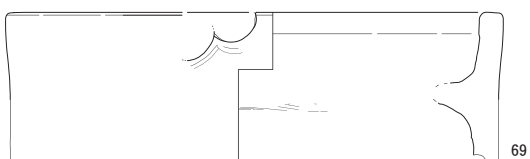
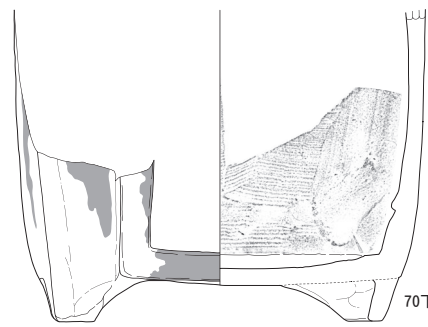
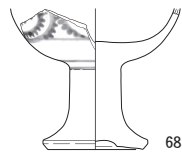
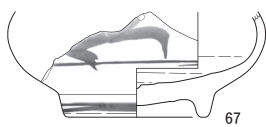
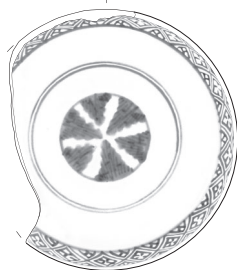
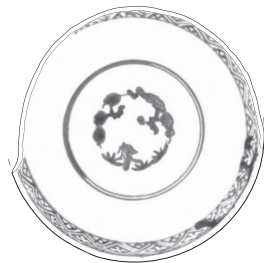
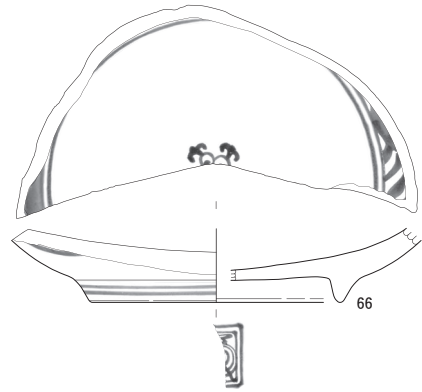
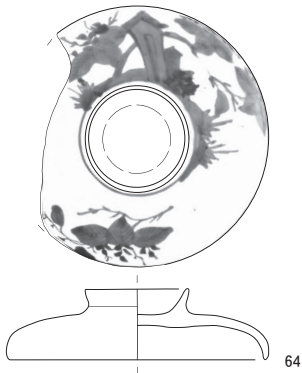
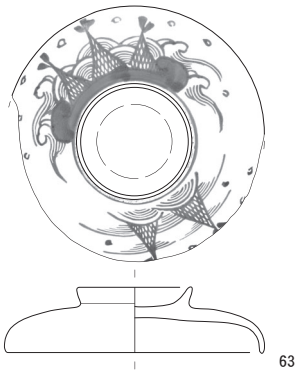
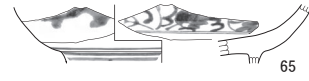
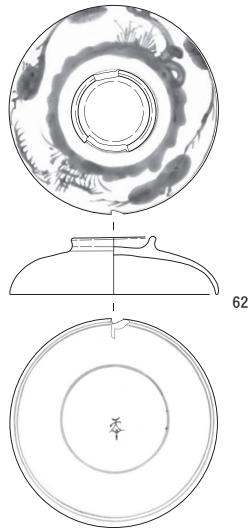
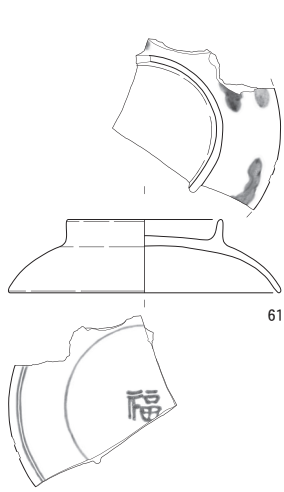




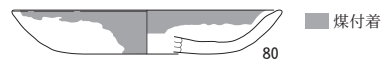
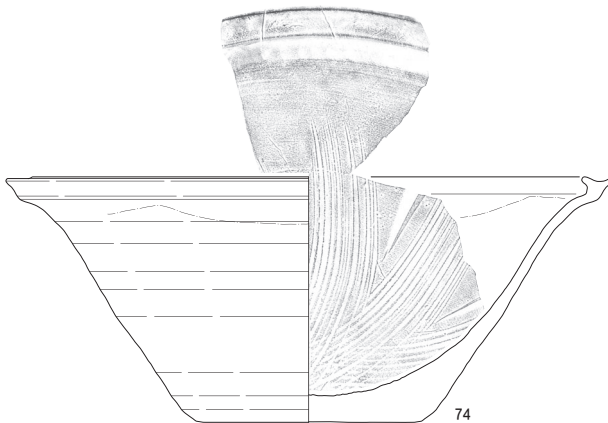
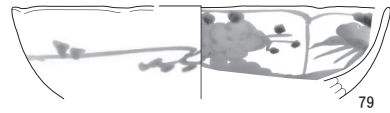
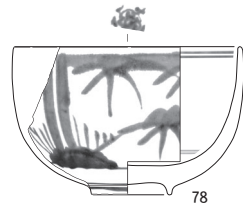
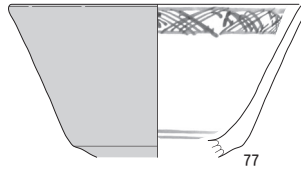
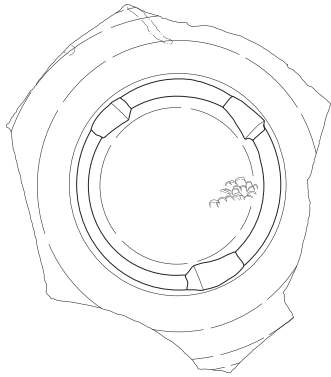
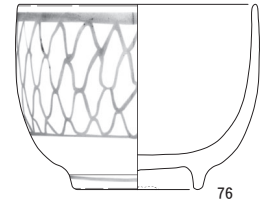
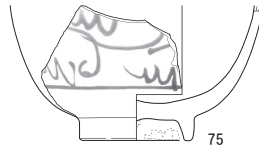
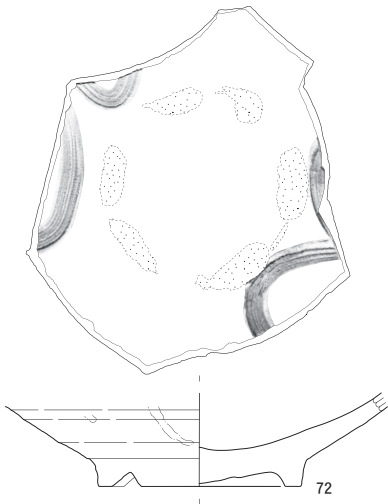
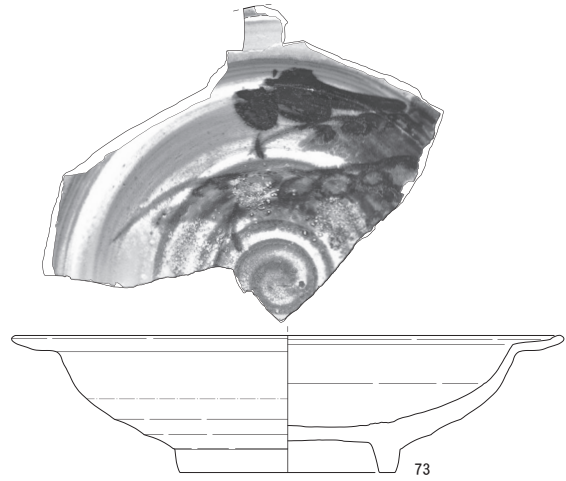
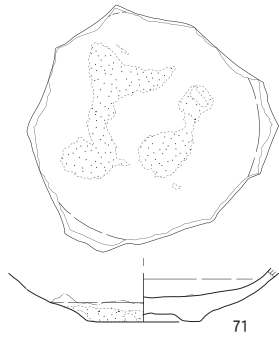
0 (40~50) 15cm (1:3)

外堀跡 覆土





SX1 上面

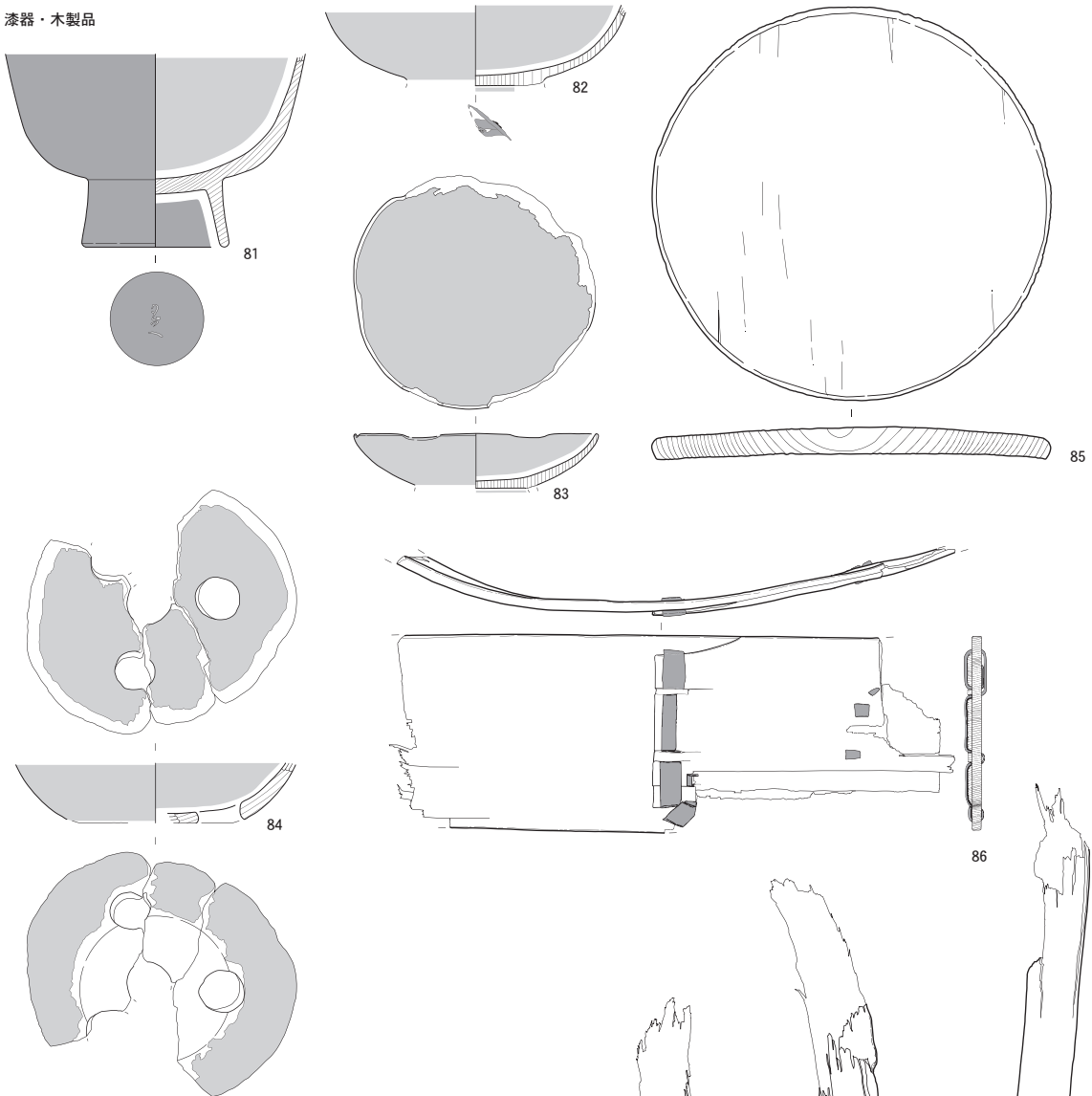


■ 煤付着

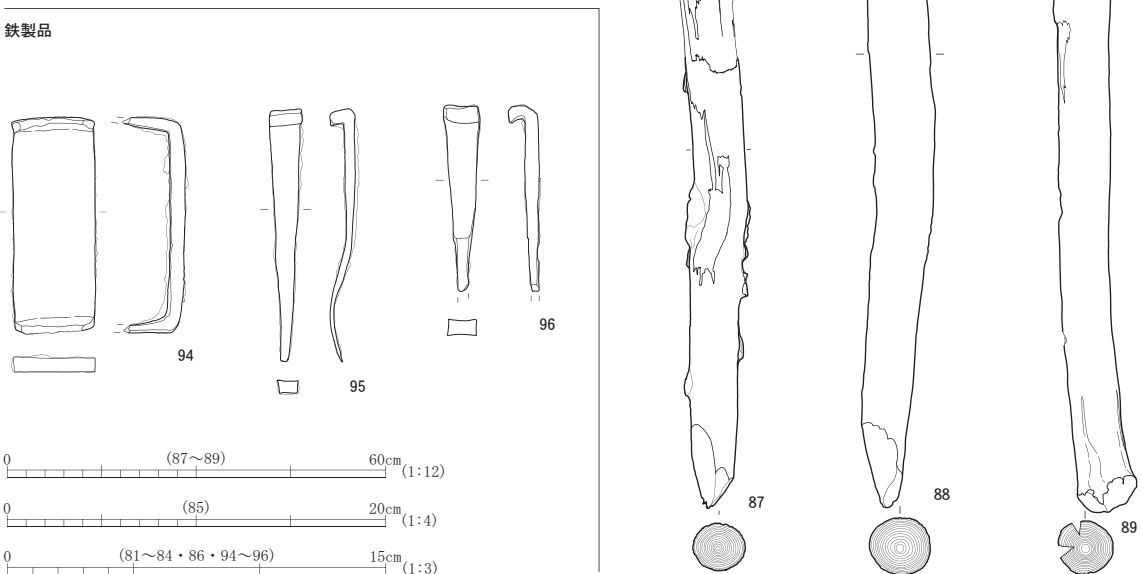
0 (72~74) 20cm (1:4)

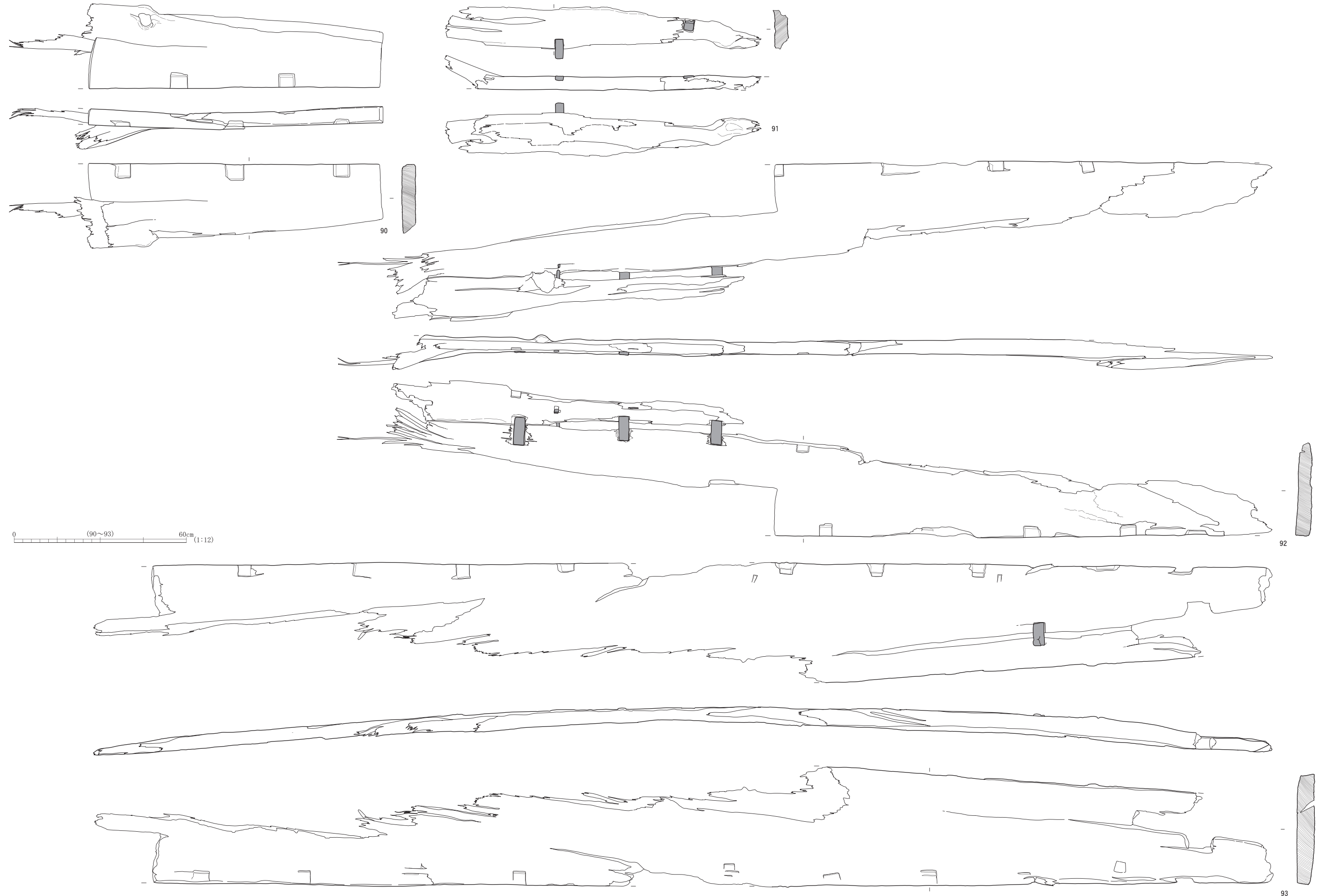
0 (71・75~80) 15cm (1:3)

漆器・木製品



鉄製品

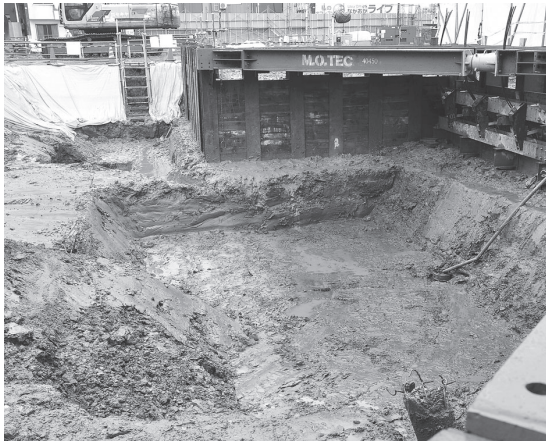




0 (90~93) 60cm (1:12)

92

93



外堀跡 検出状況 (南西から)



外堀跡 セクション (南西から)



杭列 出土状況 (南西から)



杭列 セクション (南西から)



杭列 出土状況 (直下)



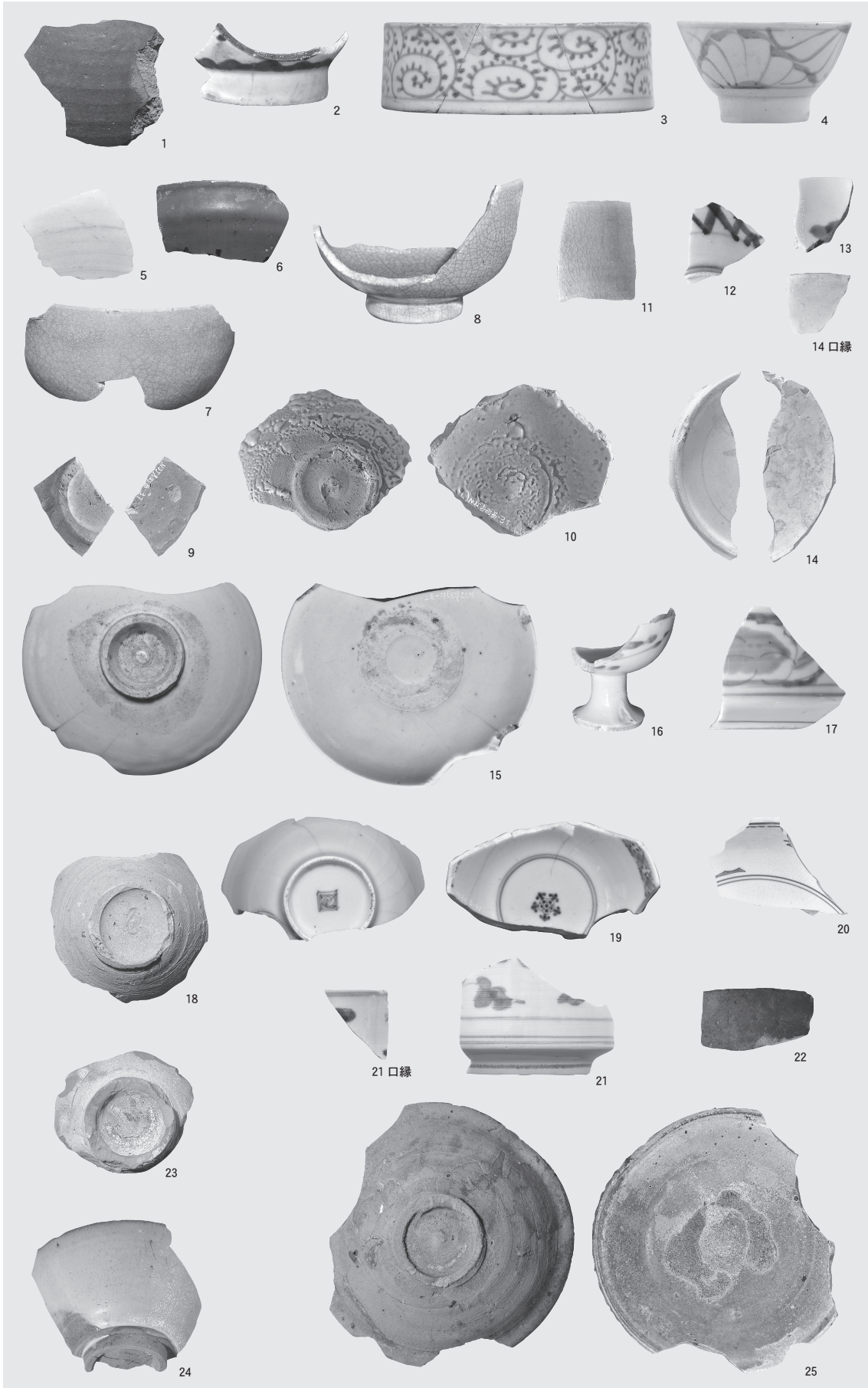
横矢板 (93) 取り上げ状況

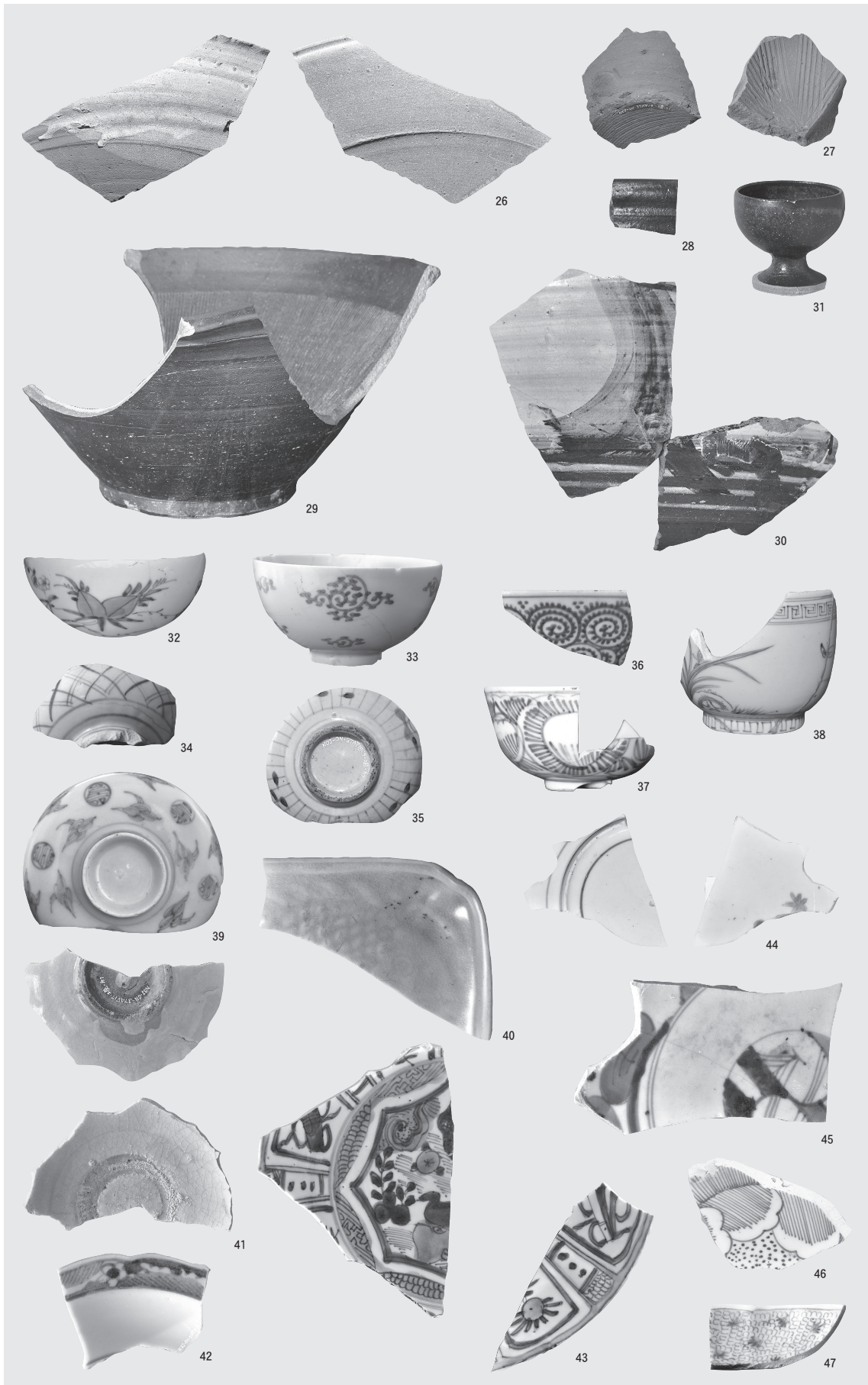


SX1 セクション (南東から)

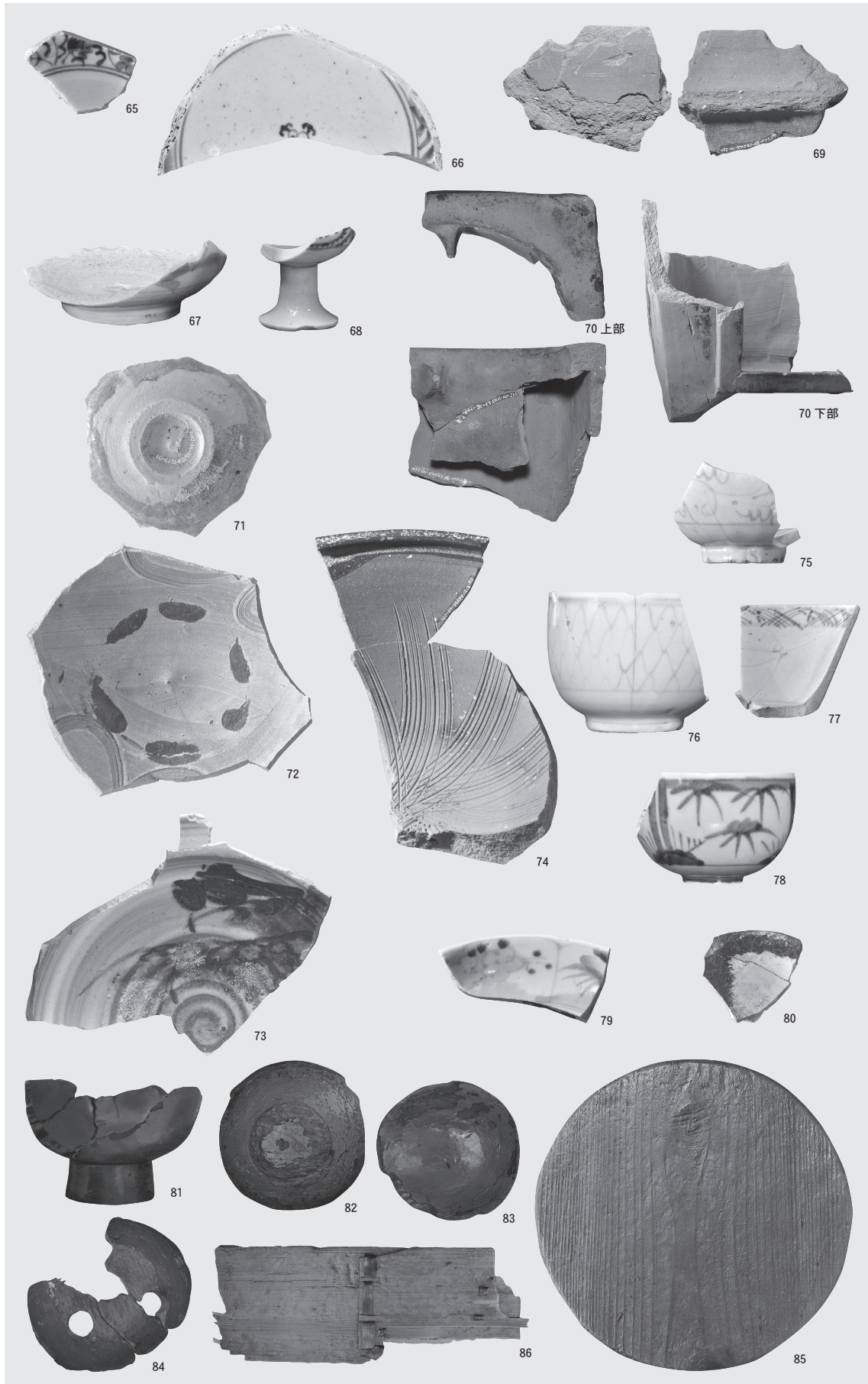


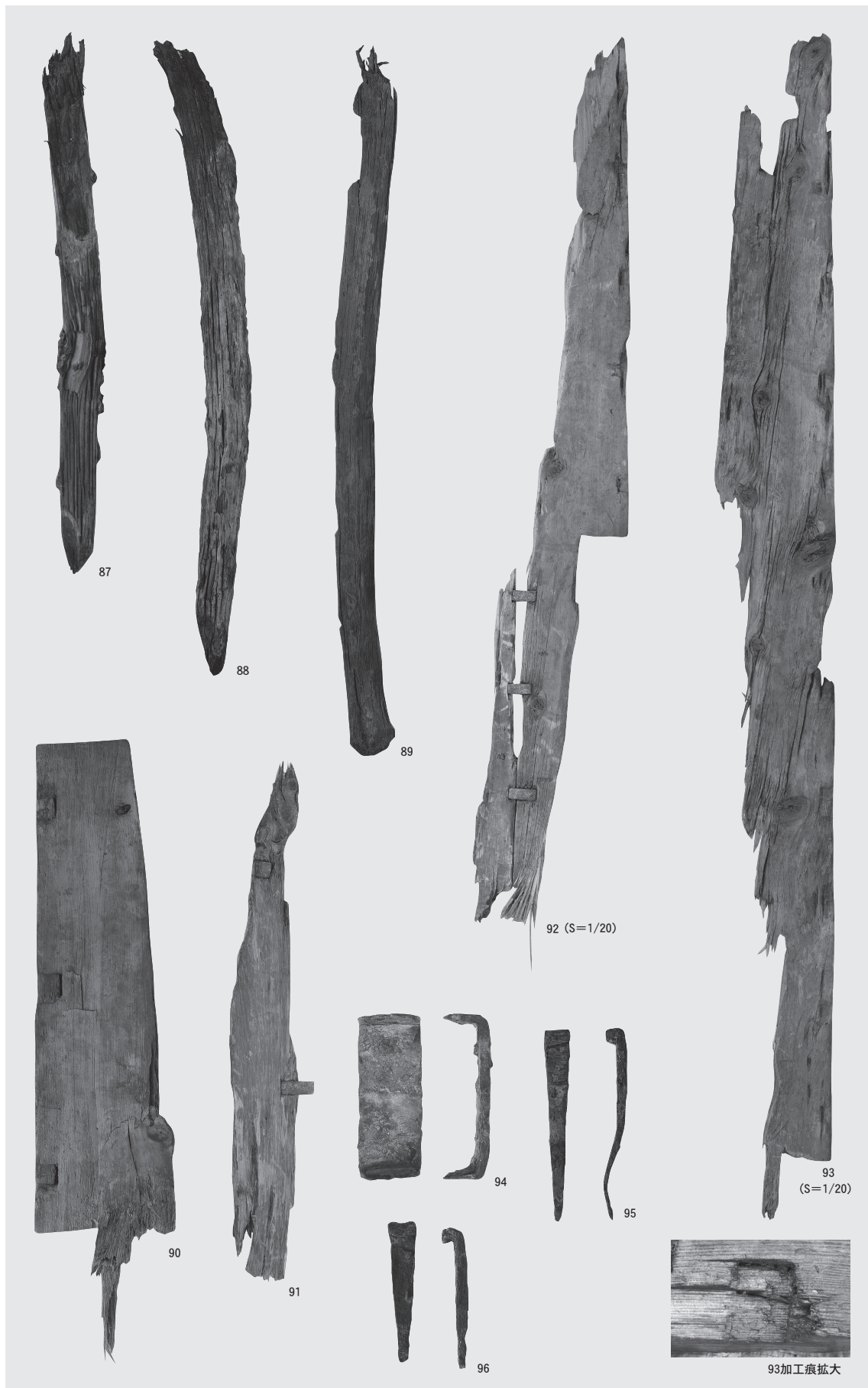
遺構掘削状況











報告書抄録

ふりがな	ながおかじょうあと							
書名	長岡城跡							
副書名	大手通表町西地区市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	鳥居美栄 竹部佑介							
編集機関	長岡市教育委員会							
所在地	〒940-0084 新潟県長岡市幸町2丁目1番1号 TEL0258-32-0546							
発行年月日	2015年3月31日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
ながおかじょうあと 長岡城跡	にいがたけんながおかし 新潟県長岡市 おおてどおり 大手通2丁目 3番地6	15201	146	37° 26′ 55″	138° 50′ 52″	20141210 ～ 20141222	130㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時期		主な遺構		主な遺物		特記事項
ながおかじょうあと 長岡城跡	城館跡	江戸時代		堀		近世陶磁器 漆器・曲物 釘・杭・横矢板		長岡城の外堀より 土留め用の杭列及 び横矢板が出土

長岡城跡

大手通表町西地区市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成27(2015)年3月31日 印刷
平成27(2015)年3月31日 発行
発行 新潟県長岡市教育委員会
印刷 あかつき印刷株式会社

